

NHK学園生涯学習フェスティバル

伊香保短歌大会

令和元年六月二十五日(火)
群馬県伊香保温泉ホテル天坊

第一部

一、開会あいさつ

NHK学園生涯学習局長

砂押 宏行

洪川市長

高木 勉

一、選者紹介

一、対談「短歌と俳句の現場から」

坂井 修一

西村 和子

— 休憩 —

第二部

一、表彰

一、選評

「熾」

沖 ななも

「短歌人」

斉藤 斎藤

NHK学園短歌友の会選者・「かりん」

坂井 修一

NHK学園講師・「潮音」

高木 佳子
(五十音順)

選評司会

沖 ななも

一、当日詠「伊香保の夏を詠む」入選発表

一、伊香保温泉宿泊券の抽選

一、閉会のことば

洪川伊香保温泉観光協会会長

大森 隆博

総合司会 フリーキャスター

北林きく子

ごあいさつ

NHK学園理事長 浜田 泰人

本日ここに「NHK学園生涯学習フェスティバル 伊香保短歌大会」を、皆様とご一緒に開催させていただきます。

今回お寄せいただいた作品数は、自由題、題詠「温」あわせて二千二十三首にのほりました。お寄せいただいた短歌の一つ一つは、作者おひとりおひとりの心のうちに、この文芸が深く根を下ろしていることを教えてください。日々のくらしと経てきた人生経験を見つめ、短歌を通してみずからの言葉と心のあり方を探求されておられる方々がこんなにも多くいらつしやることを知り、心より感銘を受けております。

わが国の古い伝統の上に築かれた短詩型文芸は、時代が変わってもその意義は変わりません。

昭和五十八年に開設された短歌講座は、これまでの三十五年間に、三十四万人を超える方々が学んでこられました。この流れがさらに大きく豊かになっていくことを願い、講座内容をはじめこのような大会や短歌学習の旅（スクーリング）など、教育文化事業の充実に、なお一層努めてまいりたいと思っております。多くの皆様のご参加とご支援を、よろしくお願い申し上げます。

なお、本日の大会大賞三作品は、各地で開催される大会の大賞作品とともに令和元年度の文部科学大臣賞候補作品となります。

最後になりましたが、大会の開催にあたり、選者の先生方、ご投稿いただいた皆様、ご協力をいただいた群馬県・渋川市ほか関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和元年六月二十五日

い あ い さ つ

群馬県渋川市長 高木 勉

山の緑が色濃さを増し、まばゆいばかりの季節となりました。今年もここ渋川市伊香保温泉においてNHK学園、渋川伊香保温泉観光協会の主催、NHK前橋放送局等後援にて第十八回「NHK学園伊香保温泉短歌大会」が開催できますことを渋川市民の代表として、心より厚く御礼申し上げますとともに感謝いたします。

伊香保温泉は古くは「万葉集」にも詠われるほどの歴史的にも有名な地であります。石段街が形成され、四百四十余年の歴史の中で文人墨客が多数訪れ、温泉もさることながら文化的にも多くの情報を発信し続け、文化振興にも大いに貢献して参りました。

今年は題詠を「温」と設定し全国より二千二十三首ものご投稿をいただき、文化イベントとして定着したものと確信しております。

最後に本大会でご対談いただく「かりん」坂井修一先生、「知音」西村和子先生をはじめ選者の先生方、ご投稿、ご参加くださった皆様並びに、ご後援団体、催しの周知にご尽力いただいた報道各社をはじめ、ご支援、ご協力賜りました関係各位に心から厚く御礼申し上げます。

令和元年六月二十五日

ごあいさつ

洪川伊香保温泉観光協会 会長 大森隆博

新緑と榛名山麓のツツジが爽やかな洪川市伊香保温泉で第十八回『NHK学園伊香保温泉短歌大会』がNHK学園と主催し、NHK前橋放送局等後援にて開催できます事に心より厚く御礼ならびに深く感謝申し上げます。

平成十三年に第十六回「国民文化祭短歌大会」を当温泉にて開催したのを機に、文化振興と温泉地の質の向上を目指し俳句大会と連動し本大会を継続開催しております。

また萬葉の時代には、伊香保の名が「萬葉集」巻十四の東歌の中、上野国（群馬県）の部に伊香保に関する歌が二十五首中九首詠まれており、その歌碑が街内九カ所に点在しております。

尚、俳句大会同様、題詠『温』を設定し全国より二千二十三首ものご投稿をいただき、文化イベントとしては、定着したものと確信しております。

最後に本大会でご対談いただく「かりん」坂井修一先生、「知音」西村和子先生をはじめ選者の先生方、ご投稿、ご参加いただいた皆様ならびにご後援団体、催しの周知にご尽力いただいた報道各社、ご支援、ご協力賜りました関係各位に心から厚く御礼申しあげます。

令和元年六月二十五日

選者のプロフィールとひとつと

(選者は五十音順)

選者



沖 ななも (おき ななも)

昭和二十年茨城生

「熾」代表 現代歌人協会常任理事

歌集『衣裳哲学』『三つ栗』『日和』など

エッセイ『神の木 民の木』など

選者



齊藤 齋藤 (さいとう さいとう)

昭和四十七年東京生

「短歌人」選者・編集委員

歌集『渡辺のわたし』『人の道、死ぬと町』

自由題では平成や令和があるかと思ったがそれほどでもなかった。時流ではなく、自分自身のテーマに取り組んでいるということなのだろう。また「温」というテーマでは、情に触れる歌が多かったように思う。人と人の触れ合いには温みがあるものだから。

地底から噴き出る湯気につつまれてほっこりとなる生の卵なまが

お題が「温」なのに、あるいは、だからこそ、ひりひりするような、迫力のある歌が目立ちました。生活の実感に根ざした歌も、自由に発想をひろげた歌も、この難しい時代をよく捕まえていて、短歌の底力をあらためて感じました。

斜めがけのカバンに入れた炭酸が尻ポケットのおさいふで弾む

選者



高木 佳子 (たかぎ よしこ)

昭和四十七年神奈川生

「潮音」同人

「福島民報歌壇」選者

現代歌人協会会員

歌集『片翅の蝶』『青雨記』

今回の投稿歌では、日々の小さな営為をていねいに見つめて詠まれた

歌を多く拝見しました。日々の暮らしの中で、様々な感覚を研ぎ澄まし、

かけがえのない一瞬をいきいきととらえる視点は、時代の新旧を超えて

豊かにあり続けるのだと思います。

しづかなる梨の畑を青あをと分けて流るる夏井の川よ

対談・選者



坂井 修一 (さかい しゅういち)

昭和三十三年愛媛生 「かりん」編集人

現代歌人協会理事 NHK学園短歌友の会選者

歌集『青眼白眼』『亀のピカソ』『縄文の森、弥

生の花』『望楼の春』『アメリカ』など

歌書『斎藤茂吉から塚本邦雄へ』『世界と同じ

色の憂愁』『ここからはじめる短歌入門』など

どんどんせわしなくなる時代の中で、どうやったら人間らしい感情や

精神を保つことができるのか。大きなものごとを見つめて考えをめぐら

すのめたいせつだが、小さなできごとや回想の中にも、本当に愛すべき

ものがある。そんな気づきを幾度も味わうことができた。

雨降ればいつも土砂降りバケツ降り天窓を踏むひかりの巨人

対談



西村 和子 (にしむら かずこ) 昭和二十三年 神奈川生

「知音」代表 「件」同人 俳人協会理事 NHK学園俳句倶楽部講師

句集『夏帽子』『心音』『椅子ひとつ』など 著書『虚子の京都』『季語で読む源氏物語』『季語で読む枕草子』

『気がつけば俳句』など

白玉の粒揃ひとは味気なく

全作品を名前を伏せて印刷し、全選者にそれぞれ入賞入選作品を選んでいただきました。大賞、特別賞は特選の中から

選の重なりを考慮しつつ、NHK学園大会事務局で決定いたしました。入選作品欄は都道府県別に掲載いたしました。

NHK学園伊香保短歌大会大賞

御堂筋を御堂マッスルと訳したるAIを少しい奴と思う

山形県 村上秀夫

イシグロ氏のドア一つずつ開けゆきてA Pale View of Hills遠い山なみの光に入る

東京都 栗原良子

△題詠「温」▽

無人レジ、セルフスタンド、介護ロボ、人の温みの零れて止まず

宮城県 角田正雄

群馬県知事賞

父亡くし退学するかと揉めたはは母校の校歌を死ぬまで歌う

群馬県 高橋伸治

渋川市長賞

神保町のブックカフェ出でて遠き日の暗がり温き古書店さがす

東京都 岡本和子

澁川市教育長賞

生みたてのたまごをにぎり思ひ出づ死にしばかりの吾子の温もり

静岡県 後藤 瑞義

澁川伊香保温泉観光協会会長賞

満開の梅はくつきり君の撮るピントはいつもわたしに甘い

岡山県 高原 晴子

NHK前橋放送局長賞

「動物園生まれで人が好きです」とアクリル越しにライオン迫り来

神奈川県 迪 方 温 宥

上毛新聞社賞

音欠いた眠りより覚め補聴器に音を戻して朝を迎へる

山梨県 宮 坂 延 雄

群馬県歌人クラブ賞

窓に向きさつと紅引き振り返る看護師東の間女性に戻る

群馬県 天 田 勝 元

沖 ななも 選

★特選

一塊の土も乱さずつつましく今朝旅立ちし蟬の抜け穴

千葉県 春原由治

蟬が生まれる瞬間、静謐とも言える厳肅な場面とも見える。地面に開いた穴のまわりに土が盛りあがってはいない。どんなふうに出て行ったのか。観察の目が確かで、無駄のない力強さがある。

御堂筋を御堂マッスルと訳したるAIを少しいい奴と思う

山形県 村上秀夫

全能のようにみえるAIにも不備がある。筋を筋肉と解釈してしまうのもおかしい。いい奴という言い方の中には相手の弱点を包みこむような余裕がある。この瞬間、AIに勝ったのである。

生みたてのたまごをにぎり思ひ出づ死にしばかりの吾子の温もり

静岡県 後藤瑞義

生みたてのたまごに死にゆく吾子。命というものには温みがある。悲しい歌だが、吾子の命がたしかにあったという実感が甦ったのだろう。温かさとは生命につながってゆくものなのである。

★秀作

うららかに桜の開花は報じらる 君の心臓手術のさなか

ITのAIのと言ふ時代にも新元号に湧くわが国人

ゆびでかいたじょうきにくもったまごのママわらうていたのになきだしました

朝な朝な片足立ちにて靴下を履きつつさぐる今日の老化度

良質の木綿の布ががちりと両手支えた台形飛び箱

国道を等間隔にゆく車列平和主義だと繰り返すよに

背後からテツと呼ばれて振り向けば見なれぬ女が犬を呼びをり

花に寄る蜂の羽音のかすかなり聴き得て耳の健在を知る

禁制の千三百年の法を解き女御輿が参道をゆく

クレッシェンドからデクレッシェンドへと移りゆき静寂に消ゆる暁のサイレン

この光が星を出でしは縄文か弥生の頃かいま届きけり

消しゴムが(あ)の字を食べた消しカスをのばしてみてもあなたにならず

題詠「温」

すずめ等の飛びたちしあと温かき砂地に窪みいくつも残る

腕時計竿につるして温き陽を当てれば秒針動き出したり

ちさき渦となりし焔を遊ばせて焼けゆく枯芝子らと見守る

温もりの己に消えたる愛犬の首輪を外し体撫でやる

「米はなあ、息しとるから温てえ」と祖母言ひぬ両手に掬ひ

周五郎のそのまなざしの温かささぶは生かされおしのは生きた

一瞬に曇る眼鏡を押し上げてふーふー、はーはーうどんをすすする

瀬戸内の段々畑の馬鈴薯の育つを速む石の温もり

栃木 小原 恵美

東京 深山路洩陽

神奈川 内藤 洋子

石川 橋本美津子

長野 柴田 康代

岐阜 飯沼麻奈美

静岡 坂部 哲之

静岡 柴 親子

鳥取 荒井 玲子

岡山 大森志津江

愛媛 宇和上 正

愛媛 矢野 和子

北海道 仁尾 泰子

群馬 高山 照子

群馬 砂賀久美子

群馬 川崎 照子

静岡 林 充美

山口 山縣満里子

山口 山縣満里子

宮崎 福留佐久子

★佳作

あの時も確か蜻蛉が止まったねあなたの肩にわたしの髪に	北海道	後藤 明美
大戦の父の右腕に深ぶかかと残るケロイド風呂で見たりき	岩手	佐藤 政勝
悲しみよ身を垂直に流れゆけ黒いコートの雨粒払う	岩手	貝沼 正子
おなかに手を当ててゆっくり呼吸するまだ生きてると夢より覚めて	栃木	押久保 準
もう一度正座をせむとスクワット朝晩十回われに意地あり	群馬	松下 昭代
着物みな盗られ引き揚げ来し母の箆笥に眠る父との写真	群馬	相沢きみ枝
ジイちゃんと呼ばれて庭に出て見れば孫が二重の虹を指差す	埼玉	武井 猛
手術中赤きランプは祈りの灯妻の手術は五時間半	埼玉	武井 猛
NHKフランス語講座聞いている身にはつかぬが何故か楽しみ	千葉	岩崎 明子
昼食のサラリーマンを眺めつつランチビールをゆるり味わう	東京	小島知恵子
徐行する救急車の前方にイヤホン、スマホの若者が居る	東京	吉田 幸男
イシグロ氏のドア一つづつ開けゆきA Pale View of Hillsに入る	東京	栗原 良子
蛇籠もてアフガンの水を治めたる益荒男なりし中村哲は	東京	秋廣 紀子
孫が来た。ずしりと重い男の子お空をひよいと蹴上げてござる	東京	吉原 菊則
おそらくは蟻の三倍働きぬローンの終る日妻と茶を飲む	東京	新美喜代男
心には欠かせぬ三大栄養素感謝喜び明日への希望	神奈川	笠原 隆司
万歩計の万に至りしことのなく戻せる零がわれをみつめる	神奈川	手塚 崇
アフリカの象のうんこを踏んだ靴いまマチュビチュの石畳行く	富山	高野 佳子
夜十時シフト引き受け食洗機は深夜料金に働き始む	富山	浦上 紀子
太古より月に幸せ祈りしを土足で踏み込む時代と成りぬ	岐阜	田中 光夫

題詠「温」

「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」記憶の扉から洩れてくる声	静岡	前田 鐵江
学徒にて七ツボタンに胸をはり逝きし遺影は少年のままにて	愛知	別府 道子
みたりこのそれぞれ家持ちちんらを持ちその子らにわれは見守られたり	京都	近江 瑞子
包装にリボンまでつくチョコの山シギユラリティーはまずありえない	鳥根	田中 勝美
「頑張っつておいで」とキヤップをなでてゆく国際コンクールに出ず日本酒達を	岡山	菊池 真理
ふんわりとぬくき土中虫たちよたつぷり寝たかや今日は啓蟄	山形	太田 亮子
降り積もる幾億トンの雪さえも春の陽射しは溶かし消し去る	山形	阿部 美夫
友の手はどれどれ温し繋ぐのを憚るほどのわが手なりけり	茨城	大曾根文子
骨と皮ばかりになりし父の背を温きタオルで拭くやはらかく	埼玉	林 直子
水温み芝川縁はさわぎたつ鯉むらがりて生命産むべく	埼玉	鈴木 武次
夫婦語で話すりビング静かなり「あれどこ」「ほらそこ」指も手伝ふ	千葉	沖田 妙子
沖繩と本土の温度差見る気する辺野古の海の青と茶の色	神奈川	長谷田光代
ていねいに土寄せられし葱の畝人の手になる温もりをもつ	新潟	折居 伸
隔日の温泉治療の送迎は娘がすることで免許返納	長野	藤森 弘國
脇きつくうつろなる子を抱きかかえ体温計の電子音待つ	愛知	外川 菊絵
陽のひかり土の温もり知らぬまま野菜は育つ青き光に	愛知	羽生由紀子
自転車に二人乗りした背の温み卒寿の姉は今にして言う	愛知	山田 妙子
電源を切りたる後も三十秒お湯が出るからコップを洗う	京都	長尾 律子
朝晩に体温・血圧測りていつしか後期高齢者となりぬ	兵庫	伊藤 弘子
ラインにて送られて来し孫の写真めいっばい広げて頬っぺにさわる	岡山	菊池 真理

斎藤 斎藤 選

★特選

父亡くし退学するかと揉めたはは母校の校歌
を死ぬまで歌う

群馬県 高橋 伸 治

女性が学問することにより理解がなかった時代。しかも祖父を亡くし、苦学して卒業した母の強い母。「死ぬまで歌う」の迫力あるユーモアから、お母様の人物像が立ち上がってきます。

「動物園生まれで人が好きです」とアクリル
越しにライオン迫り来

神奈川県 迪方 温 峇

飼い馴らされながら、野生をまったく失ったわけでもない、謎の生き物がやって来ます。結句「ライオン迫り来」の四・四の字余りが、ほんとうににじり寄ってくる感じで、すてきに不気味です。

題詠「温」

「温かい言葉がけ」といふ方針にわれらはす
がるやうなり 学校

岐阜県 三田村 広 隆

「温かい言葉がけ」とわざわざ打ち出すことに、どうにも不自然さを感じながら、必要なのでせざるを得ない。「すがるやうなり」の切実さ。そして一字空けからの「学校」の俯瞰に、批評があります。

★秀作

腰痛を患う友と同病の夫の声なりバスの後方

男おの曾孫始めさざ波のハイハイもおお波となり壁に近づくと

一途なるホーム長化けし赤鬼が居住者の豆に床でのたうつ

「先生も小便でるのか」小一が見上げて並び上手に出しぬ

福寿草咲くとはがきに裏表あふるるまでに書く施設の母に

にんじんの試食笑つちやうほどあるよ 子どもら走る野菜売場へ

デバ地下をママに抱かれてみどり児のぐすることなき物色続く

ほんの少し空腹なのがちようどいい少女の恋はうつろいやすく

新しき犬を迎えに行くバスはかげろうの街かけ抜けてゆく

包装にリボンまでつくチョコの山シンギュラティーはますありえない

時刻表見るまでもなしバス停に人が並べばバス来る時間

「起立・礼」着席ことの背の力み孫の入学妻と同席

題詠「温」

プードルとぬるむ窓辺の三月はあの三月を廻る三月

微ぬる温き湯の湯舟の縁にうなじ乗せ心放せば残る耳鳴り

墨かの香は暖かき部屋漂いてキツチンのカレーの香にも混じる

新聞のおくみやみ欄に馴染みたり縁側のうららにうつらうつらして

体温の無き身体より母の手は子をさがしつつ息を引き取る

電源を切りたる後も三十秒お湯が出るからコップを洗う

よくできた嘘を信じていた頃はわが体温のほんのり熱く

寂しさは猫の温みにあずけおき明日の猷立考えており

山形 松田たつ子

栃木 池崎美代治

栃木 渡辺 光男

群馬 熊澤 峻

群馬 倉沢美代子

埼玉 古谷真利子

大阪 岩本かつひろ

大阪 松山 真弓

兵庫 松浦知恵子

島根 田中 勝美

愛媛 窪田 憲二

福岡 藤村 義治

宮城 木村 譲

千葉 岩崎 勝

東京 木村 悦子

岐阜 松尾 東一

愛知 原田 熙恵

京都 長尾 律子

大阪 松山 真弓

愛媛 矢野 和子

★佳作

「ひげそりも面倒だな」の独り言卒寿を過ぎて父は丸まる
炭酸の泡のごとくに消えてゆく脳細胞の親しきやから
九十四の歳を忘れる快感は畑に畝たてコーヒー飲むとき
釣り革の客一様に揺れている混み合う車両に指示さるるごと
朝なさな父の捲れる日めくりの今日の日付のけふにほつとす
子育てを終えたる人は犬を飼ひタタタ、タと馳けゆく花の坂
肌寒き故を知りたり向きあひてたがひに貢めくりをる音
おだやかに昭和を語るあなたからあなたのことを知ろうとしてる
久に会ひし友はいきなり「あなた誰」「私はあなたの親友ですよ」
日の光ソーラー装置に蓄えて時間をずらし家庭を照らす
着信あり笑顔に変わり返信す窓の行き来の速きことかな
初めての介護入浴裸ン坊生まれられた時のようなこちす
われよりも弱き男はどこに居る石蹴飛ばせば跳ね返る石
チューブより食べ物流す操作にも義弟は慣れて妻を励ます
お祝いに孫に贈りて早や六年桜の陰でサドルを下げる
どこからも富士山観れる静岡は朝の挨拶山を語ろう
目まいする程の未来に放射線消えると聞けり生きて百年
母に不安持つ子は迷子にならぬとう二人子吾の服握り育ちぬ
船戻る港の朝市ト口箱の値付けに人の群がりて待つ
タクシーを拾うつもりで上げた手を君がつかんで上に引つ張る

北海道 大原 廣子
青森 木立 徹
岩手 小野寺弥四
秋田 鈴木 敏男
茨城 森 純一
栃木 箕輪 イセ
群馬 糸井 孝
埼玉 岩崎 雄大
埼玉 小池喜代子
千葉 上田 康彦
東京 近藤精一杯
新潟 堀口 寿仙
長野 関 啓
岐阜 元田 鈴子
岐阜 細田 收
静岡 戸板 弘子
愛知 福島 睦子
奈良 福田示知恵
岡山 一柳いくみ
岡山 小橋 辰矢

過疎地区へ連呼する名を残しつつ過疎には触れず選挙カー行く
「お若い」と医師が言うから本当だろ「お世辞だよ」とは夫のやきもち
故郷に戻れば折り重なりて聞こえる蛙鳴く音の熱きもてなし
気がつけば数独しつつか爪を噛む喜ぶべきか自歯あることを
拾骨に踵だ脛だ喉仏みなにぎやかに箸を動かす

題詠「温」

ストープの温もりの側にはいつもじつちゃんがいたじんどうっていた
ふつくりと温泉饅頭ほどの山街が一番きれいに見える
もう直に霜降りるだろ わが厨に入りたる竈馬よここにおれ
目まいして入る布団の足元に夫が入れたる湯たんぼ温し
発掘の調査員らを憩はするブルーシートに春の温もり
つなぐ手を離れた後の温もりを逃がさないよう入れるポケット
車中でと母の持たせし筍飯残る温みをゆつくりと食む
赤い風の吹く北総はまだ温き餅に黄な粉をまぶしたやうな
霧深く顔さたまらず交ふ人に微温く言ひたり「おあがりなさいまし」
冷えし手を牛に御免と謝つて張りたる乳房しほれば温し
ステントの留置オベ経て体内を巡る血温く見る物優し
石段の温泉街をはつ夏の夕べ涼しき風吹き抜ける
バス停で手を温めし缶コーヒー今ゆつくりと飲みているなり
体温が高い女を抱くオレの頭の上で燃えている星
温暖化すすむ師走に漬けこみし大根いずれも酸っぱくなりぬ

北海道 三 智
秋田 鈴木 仁
山形 名取 榮子
栃木 塩沢かつ子
群馬 善如寺裕子
千葉 毘舍利愛子
千葉 毘舍利愛子
千葉 高伸 一郎
千葉 高伸 一郎
長野 後沢 恒子
長野 松崎 歌子
三重 奥山 功
和歌山 木下 昭一
岡山 小橋 辰矢
愛媛 渡部 裕子

坂井 修一 選

★特選

イシグロ氏のドア一つずつ開けゆきて
遠い山なみの光
 A Pale View of Hillsに入る
 東京都 栗原良子

カズオ・イシグロの小説は、傷深い精神を描くもの。
 処女作『遠い山なみの光』を読んでいると、まさにその
 精神に分け入っているような感覚になる。「ドア一つず
 つ」「入る」の言葉選びが見事。

満開の梅はくつきり君の撮るピントはいつも
 わたしに甘い
 岡山県 高原晴子

夫が撮った私の写真は、なんだかほやけている。これ
 は私だけの見立てかもしれないのだが、でも満開の梅の
 ほうはびったりと美しく撮れているようだ。夫婦の機微
 が自然に歌われていて楽しい一首。

神保町のブックカフェ出でて遠き日の暗がり
 温き古書店さがつ
 東京都 岡本和子

神保町古書店街にも押し寄せる時代の波。ブックカ
 フェでひととき過ごした主人公は、若い日親しんだ伝統
 的な古本屋さんが恋しくなり、これを探す。「遠き日の
 暗がり温き」の言葉の斡旋がみごと。

★秀作

ひそやかに「スタンドバイミー」歌いつつバスを待ちおり菜の花の丘
 二階よりフルートの音の聞こえくる明日は家出る受験終えし子
 垂れたる雪柳の穂に触れぬよう大廻りする春のジョギング
 ままごとの皿に盛られた黄水仙ブーツを脱いだ春告げの花
 夜十時ソフト引き受け食洗機は深夜料金に働き始む
 良し悪しの見分けもあらず幼等は言葉のジャンル駆けて遊べる
 スマートフォンの使い方がまだわからねどわかっているのよ黒豆の味
 青年よサナギの中で芋虫はドロリと溶ける蝶になるため
 消しゴムが(あ)の字を食べた消しカスをのぼしてみてもあなたにならず
 老眼鏡かけて夫の髪を切る老いたるバルタン星人のよう
 集配車ポストの前に発車せず足曳くわれを待ちてくれたり
 偶発に核戦争は起きるやもAI同士が知能競うを
 埼玉 平井加恵子
 東京 山口 信子
 神奈川 大石 知子
 新潟 原 真弓
 富山 浦上 紀子
 福井 永田きみ子
 大阪 熊ノ郷紀子
 兵庫 高山 葉月
 愛媛 矢野 和子
 長崎 田中 光子
 大分 羽田野とみ
 大分 佐藤 政俊

題詠「温」

「高専」と言えば「鉱泉？」と返されてほろ苦かりしわれらが青春
ちはは
 父母の生まれ育ちし上州よベエエ言葉に温かさあり
 白杖の夫婦を声にて案内するビッグイシューを売りたる男
 箱中で植えてうえてと馬鈴薯が土を恋して芽伸びする春
 冷えし手を牛に御免と謝つて張りたる乳房しほれば温し
 なだめつつデイへと送りし母の残す枕のくぼみと布団のぬくみ
 日本語がうまくなつたねケビン君温きお釣りをもらうコンビニ
 春の陽に人肌ほどの温み持つ白秋の歌碑にながく掌を置く
 群馬 福田 成雄
 東京 梅澤 昌子
 神奈川 迪方 温容
 石川 土田由紀子
 長野 後沢 恒子
 岡山 大武千鶴子
 福岡 塩田 直子
 大分 羽田野とみ

★佳作

幸せに繋がる試練と告げやらん合格の夢やぶれし孫に	秋田 大友 孝子
御堂筋を御堂マッスルと訳したるAIを少しいい奴と思う	山形 村上 秀夫
「百七十」数ふるわれに縄飛びの孫のリズムはいよいよ良けれ	茨城 中澤 睦子
トラクターハの字ハの字を黒々と道路に落して春を告げゆく	栃木 池崎美代治
解禁日つりの仲間の置きてゆく熊笹にのる二ひきの鮎を	群馬 神澤 静枝
着物みな盗られ引き揚げ来し母の箆笥に眠る父との写真	群馬 相沢きみ枝
優しさの曲線素直な直線が上手に交わる此処の世界で	群馬 桑原 環世
庭に出て歯みがきなすは楽しけれ鳥の声きき花を眺めて	群馬 林 惠美子
おだやかに昭和を語るあなたからあなたのことを知ろうとしてる	埼玉 岩崎 雄大
元祿の世よりつづきし父祖の畑いま猪の住み処ぞ寂し	千葉 石原 稜子
指先に今も残りし感触は給料袋の薄き手触り	千葉 熊谷 貢
手を伸ばし揉みほぐしたき西の空父の背に似し大き雲浮く	千葉 佐藤 栄子
憧れと不安に満ちし花の色十五の我の前なるパンジー	東京 中西 克弘
我が腕の血管見つめステントを入れる夫の手術を思ふ	東京 早川 笙子
コンビニのブランド米のおにぎりにパキツと海苔巻くまるで折り紙	神奈川 横山美智子
蔓が伸びフェンスを越えて実りたるスイカ頑張る見下ろせば川	長野 柴田 康代
われよりも弱き男はどこに居る石蹴飛ばせば跳ね返る石	長野 関 啓
亡き猫の長いしっぽを通してた小さな穴ある小さなオムツ	長野 中根みち子
真夜中も都市の夜空は明るくてオリオンはただ孤独なトルソ	愛知 浅井 克宏
この町のアメリカフウはなぜだるう等間隔に裸のままだ	大阪 富田 桜子

「おばあちゃんは一人だから」と夕方に帰りし孫が又戻り来る	兵庫 木村 仁美
里山の老人会のお開きは全員歌う「青い山脈」	広島 石口 史子
甘夏を浮かべ湯船にひたりつつ野火に縮れしまつ毛を洗う	長崎 長谷智香江
マネキンの黄色の服が軽々とフロアに立てり春の風吹く	熊本 木下芳根心
拾骨に踵だ脛だ喉仏みなにぎやかに箸を動かす	熊本 徳山久仁子
—— 題詠「温」 ——	
祖母残す昭和三年の『万葉集』「令和」の件り春の温もり	北海道 高本 智宏
おぶいたる背の温もりをふと想う大空の吾子四十にならむ	福島 高崎よし枝
風もなく日向ぼっこで温もれる庭の草取り水仙が咲く	栃木 高橋 君子
ガラス戸を透かし入り来る春の陽に背な温かく万葉集詠む	群馬 深澤 巴
日だまりの水の温もる溜池に緋鯉の鱗がかすかに揺れる	埼玉 武井 一 猛
幼き日だるまストロウに弁当箱昼餉は母の温もりも食む	埼玉 河原 敏子
人体はなぜに哀しくかくのごと温き曲線えがきををらむ	千葉 高伸 一郎
午後の陽に押されて散歩する道で尺取虫は春を数える	千葉 ミサカシラ
温ければただそれだけで幸せなホモ・サピエンス阿弗利加起源説を信ず	東京 福島 隆史
世の母の温き乳房よ優しさよこの世の悪の全てを溶かせ	岐阜 川瀬 敏枝
「米はなあ、息しとるから温てえ」と祖母言ひぬ両手に掬ひ	静岡 林 充美
ゆつたりと柚子湯につかるカピバラの目を細めるに温まりたる	静岡 樽松 尚子
温かき湯呑みに描かれし絵文字なりいろはにほへと共に飲み込む	山口 松浦美智子
AIに頼る未来にならむとも温もり通ふ言葉減ぶな	愛媛 三島誠以知
そら豆の鞘を開くとみつつの子ふわり真綿に包まれ眠る	福岡 川畑万寿代

高木 佳子 選

★特選

窓に向きさつと紅引き振り返る看護師束の間
女性に戻る

群馬県 天田勝元

看護師さんが口紅を引く。小さな、でも華やかな一瞬が、鮮やかに上句で表されています。看護にあたる側が明るい表情で居ようという、仕事への決意も見えてくるようです。

音欠いた眠りより覚め補聴器に音を戻して朝
を迎へる

山梨県 宮坂延雄

「音欠いた眠り」「音を戻して」と、聴覚と音について、一首の中に時間の流れをおいて見つめた、「面白い発見のある歌です。補聴器は、その字のように「器」なのだと思いました。

題詠「温」

無人レジ、セルフスタンド、介護ロボ、人の
温みの零れて止まず

宮城県 角田正雄

上句の全てを使って人の行為を代替するモノを挙げたところが面白いです。人と人の関わりによってなされる無形の力の喪失が、結句の「零れて止まず」に凝縮しています。

★秀作

どどどど幼なは走る全身にあふれる命がわたしを染める
トラクターハの字ハの字を黒々と道路に落して春を告げゆく
「先生も小便でるのか」小一が見上げて並び上手に出しぬ
差し出しの名なしの賀状すぐ判る大きな筆字元氣だあいつは
指這せ幽かな凸をみつけ研ぐ息を整へ冴える感触

铁塔が川に映りて突きささる小鴨がゆっくり天辺泳ぐ
川縁の枝より落ちし寒椿ひとつは流れひとつは留まる
真夜中も都市の夜空は明るくてオリオンはただ孤独なトルソ
えらび来し一輪活ければ水仙は抗う如くくるり横向く
大口をあけて奥歯の治療中頭足類にわれはもどりぬ
衣替え常に閉じたる抽斗を開ければ亡夫のボタン転がる
甘夏を浮かべし湯船にひたりつつ野火に縮れしまつ毛を洗う

題詠「温」

春の香をこわさぬほどの温度にて露のとうの天ぶら揚げぬ
腕時計竿につるして温き陽を当てれば秒針動き出したり
母編みし縄あみセーター波うねり母の温もり波のごと寄す
てのひらの温みに馬のよるこべり母の使ひし象牙の根付
温めて娘のメモに肉じゃがが扉の中でチンと答える
膝痛にヤツケのズボン重ねはき体温保ち屋根補修はげむ
冷えし手を牛に御免と謝つて張りたる乳房しほれば温し
三日間湯船につけし糶種のキラキラ芽の出ず乳歯の如し

- | | | |
|-----|-------|----|
| 山形 | 那須 | 桃子 |
| 栃木 | 池崎美代治 | |
| 群馬 | 熊澤 | 峻 |
| 千葉 | 上田 | 康彦 |
| 石川 | 伊藤 | 弘美 |
| 愛知 | 真野 | 勝子 |
| 愛知 | 中村佐世子 | |
| 愛知 | 浅井 | 克宏 |
| 和歌山 | 諏佐 | 幸 |
| 鳥根 | 田中 | 勝美 |
| 長崎 | 村崎美智子 | |
| 長崎 | 長谷智香江 | |
| 栃木 | 齋藤 | 宏壽 |
| 群馬 | 高山 | 照子 |
| 東京 | 栗原 | 良子 |
| 神奈川 | 遠藤千恵子 | |
| 神奈川 | 越野 | 藤子 |
| 福井 | 児玉 | 普定 |
| 長野 | 後沢 | 恒子 |
| 長崎 | 長谷智香江 | |

★佳作

縦糸にうすねず織び織つていし紅の赤味のやわらぐように 母乗せて地割れの庭を脱出す地球の闇にさおをさすかに 秘密まで言い当てられる心地して人生初の胃カメラをのむ 石段に幼稚園児のお雛さま口元まなざしふくふく動く コンピニのおにぎりほおぼる朝の尾瀬寝ている妻に声掛けず来て 真上から人を覗けば惑星のように臓器のからだに浮かぶ 地球捨て駆け落ちするがに夕空を飛びゆく二機は点と光りて マリナーズ守備も鮮やかイチローも帽子を脱げばロマンズグレイ 仕事から帰る夫に背負われてリュック濡れおり汗かくごとく 腰痛にて平目の如く臥している背にじわじわと時間溜めゆく インフルエンザ対策つづく病棟に面会制限解けて春来ぬ 垂れたる雪柳の穂に触れぬよう大廻りする春のジヨギング 初めての介護入浴裸ン坊生まれの時のようなこちす 良質の木綿の布ががちりと両手支えた台形飛び箱 幼き日ラツパ飲み悪しと言われしよ信号の影に入りて水飲む 背後からテツと呼ばれて振り向けば見なれぬ女が犬を呼びをり 花に寄る蜂の羽音のかすかなり聴き得て耳の健在を知る 何もかも手に入れられる訳じゃないと十五の吾子に諭されて春 木枯しに吹き上げられしポリ袋どこへ行くのか寒くはないか ヨガ十年牛面のポーズきわめんと組む関節は軋みつつたわむ	秋田 北嶋 啓子 茨城 大曾根文子 栃木 中村 葉子 群馬 高橋 三枝 群馬 今井 五郎 群馬 進在小夜子 群馬 宮原 義夫 千葉 岸 きよ 千葉 佐藤 陽子 東京 浦本 洋子 神奈川 鎌田 澄子 神奈川 大石 知子 新潟 堀口 寿仙 長野 柴田 康代 岐阜 植田美和子 静岡 坂部 哲之 静岡 柴 親子 愛知 小川 清紅 大阪 金子 公宥 大阪 利光 純子
---	--

お隣は五人の若きベトナム人中古自転車五台が寄り添う 小刀で夫が研ぎたる鉛筆につける家計簿一人分となり 拾骨に踵だ脛だ喉仏みなにぎやかに箸を動かす 玉レタス結球待てず剥がしおり未完の球形想う食卓 —— 題詠「温」 ——	愛媛 横田美貴子 熊本 益田 節子 熊本 徳山久仁子 熊本 田川 清
--	---

泣きやまぬ児を負う背にじんわりと温きいのちが伝わりて来ぬ いま採りて来たるばかりとふ鶏卵のわが手の上にありて温かし 反対も郷土歴史もブルドーザー一挙にならし沈む温泉 体温の引きゆく細き父の足若き日牛と代掻きし足 馬鈴薯を植うる黒土地下足袋の足裏にほのか温もり伝ふ 嫁さんがくれたダボダボソックスが温かいいい今日も履いてる じゃがいもは大地の鼓動につつまれて春の温もり畝深く待つ 温々と育ちてわれは明日嫁ぐおとぎの城は遠くなりゆく 不精して温きふとんを出られずラジオ体操手だけで済ます 温もりを絶やさぬように限界まで仕事続けるコンピニ店長 お義母さん菖蒲のお風呂が沸きましたお背中流してさしあげましょう ラインにて送られて来し孫の写真めいっばい広げて頬っぺにさわる 温き土解して時きし赤紫蘇で大梅五キ口真っ赤に染めたり ポケットの貼らないカイロもみほぐし指先温め針仕事する 子の発ちて家は俄に広くなり思わず握る夫の体温し	青森 星野 綾香 宮城 大和 昭彦 群馬 横山 房子 群馬 横山 房子 群馬 湯浅 茂子 東京 齊藤 耀子 福井 中橋 睦美 岐阜 飯沼麻奈美 大阪 船越 一英 大阪 岡 高代 兵庫 木内美由紀 岡山 菊池 眞理 愛媛 青野 千春 愛媛 横田美貴子 高知 大寺 和美
---	---

入選

北海道

一センチほどの霜柱寄りそつて檜の枯葉をぐんと押し上ぐ

仁尾 泰子

……………題詠……………

「温暖化、大うそですよ」と言ふ人の講演ありて一瞬なびきぬ

大原 廣子

まだ温い猫をギューッと抱きしめる首輪の鈴がチリリと鳴った

後藤 明美

天井に耀う水影お日様と雪解け水のしばしのワルツ

樋口 幸子

雪なげで夜ともなれば温湿布両膝に貼り湯たんぽ入れて

宗片勢津子

透析を終へて帰宅の夫が飲む珈琲カップに立つ湯気白し

山本 マサ

青森県

「おはやう」に振り返りしかば蝙蝠傘の君は長靴われも長靴

大野あつ子

うっすらと錆をおびたる鋏先に春のひかりが和らかそそぐ

鎌田 保

玄関に野菜置かるる土地にすみ今朝は山菜のごみおかれる

種市 要司

鉢植えの木を地に移しやるように子をおくり出す雨にけふる日

星野 綾香

……………題詠……………

春の雪踏みて忌の日の金盞花温厚なりし夫に会ひたし

大野あつ子

温まる言葉が欲しい冬の日のは心の底まで冷えてゆくから

木立 徹

温暖化は変革迫り青森が桃の産地となる日も近し

三浦 敬

岩手県

若き日に教師でありし学校の跡地にコスモスゆれているなり

小川 クニ

産直で買いたる青菜も赤かぶも樽に漬け込む秋日和の日

小野寺左委子

……………題詠……………

あかき服温きコートを求めたりいましばしこの世を楽しまん

小野寺左委子

温もりを求めて君を抱きしめる故障していた調節機能

館洞 嗣雄

竹スキー跳ばして滑り雪塗れ囲炉裏に湯気立て餅食みし日よ

南館 増子

宮城県

安らげき波の音聞こゆ夕かげの淡々と差す海の渚に

川勝 容子

人類は夜行性かと問うてみるコンビニですよと原発が言ふ

木村 謙

病室の向かいのビルのフェンスに鳥二羽見ゆ退院の朝

白石 治男

草萌ゆる山の傾りに放ちたる黒毛の牛をムチで追ひあぐ

遠山 勝雄

わが心手折られぬやう引き締めむ赤き実つけしまむし草立てり

平野由美子

この道をまつすぐに行けばあの家に入りゆくなり婆やのこゑす

大和 昭彦

……………題詠……………

陽のひかり温もりくればやわらかに山鳩ほろほろ裏山で鳴く

齋藤美和子

体温計差し出してから脈を取る若きナースの指温たかき

白石 治男

日向ほこ陽ざしの温くみ手ですくひたぐり寄せゐる老人ひとり

遠山 勝雄

ハクセキレイ・雀も寄り来る亡母の庭更地に温き啓蟄の日は

本郷 良子

秋田県

大根も茄子も皮干し汁の具に明治の母がそうしたように

菊地 順子

寄せ雪の高きに立ちて南の霞む遠嶺の彼方をおもう

北林 ミネ

縄文の玩具なりしかオバQのごとく笑ひし岩偶出で来

下村 清

夕暮れに泉のごとく湧きいでるカラス群団果へもどり行く

二牟礼 勉

……………題詠……………

昨日より春の陽さしてアスファルトあらわな雪道やすやすと行く

大友 孝子

久々に太陽光線顔照らすバスの中では温室気分

二牟礼 勉

温の日を見極め白鳥お互いに北指し声を掛け合いて行く

山形県

父母のすでになき里久に訪いもの忘れゆく兄と対座す

ちちははと囲むいろり辺大鍋に伝九郎柿の渋を抜きをり

逢い初めし春より妻と五十年この春妻も古希を越えたり

市長より異例の呼びかけ デパートを支えてください買うということ

..... 題詠

亡くなりし伯父の頬まだ温かくわが両の手もあたたかくなる

海底のへどろが地上をのみこんだ八年経し海は温くおだやか

お金落ちましたよと声かけくれぬ庄内の温かさ感じる

吹雪くあさ昇降口に掛けられた子らのコートの体温を見る

福島県

雪折れの水仙切りて食卓の隅に置きたり徳利にさして

原発の事故に追はれし悲しみはすべてを否定さるる哀しみ

三日目によくやく解けた教独に心も晴れて雨に気付けり

朋友の茶毘を終へたる帰り際天つ日はあつき雲にかくれる

八年もくるりくるる走馬灯タイムマシンは鍵失せたまま

百歳をめざせと声をかけくるるこれより五年後険しさ想う

稲刈の終わりたる田とまだの田のタペストリーの広がるを見ゆ

対岸の教会青く日曜の安息の日の雪静かなり

..... 題詠

明けがたに妻の布団に潜り込む飼ひ猫もまた温かさ知る

温もりのある家庭ならそれでよし後期高齢むかえる吾は

水温むわが家の田んぼに蝌蚪泳ぐバイパス道に埋まる前は

堀川 弘美

太田 亮子

富樫 桂子

中村 誠一

名取 榮子

那須 桃子

安部 重子

五十嵐春潮

村上 秀夫

五十嵐定幸

伊藤 雅水

小林 綾子

笹島 敬子

高崎よし枝

田中 京子

新井田美佐子

峯村琥珀山人

穴澤 盛之

菊池 重堅

草野 美子

昨夜からの風のおさまり縁側に温もりおれば猫も並びぬ

歌を褒め茶菓子をめでて帰りたる客の温もり残る座布団

茨城県

この星の空気を君は吸いたるか産声あげしその瞬間に

「はい、チーズ」のズの間際にまぎれこむ来世から来た僕の分身

庭先で切り干し大根ひろげぬるの手の元をつつむ冬の陽

何年ぶるか娘の煮たロールキャベツをぐくと口へウー今日は何の記念日

..... 題詠

揺り椅子をいつも誰かが占領す小さきリビング幸福温度

テーブルに夫はひとつ置いていく温もり残る春のあんまん

床暖のスイッチ切りてなほぬくしかつては囲炉裏に温灰のあり

受話器ごし頭を下げるひと多くこの国にまた春めぐり来る

常磐線沿いの校舎の窓に見る「おつかれさま」の文字温かく

水温む川面に頭つき出して二匹の亀が犬掻きしてる

寒いねと手を握り合い温もりを二人でつくる冬のお散歩

温かき添ひ寝の猫はいつの間にも柿の若葉が光る木の上

抱く孫のなけれど君の温かき目差いつも幼子をだく

栃木県

本位牌一周忌控え作りなば妣は過去へとさらに遠くへ

榛名山背にした古き家族写真ちひさき弟がカメラ構へき

母の焼きし炭そのままに六十年底冷え続くも今年も使えず

里人が味噌をくれしと百歳の涙が語る那須の開拓

教え子の気前の良さが玄関に新米一俵どすと下ろす

絶対に勝てないゲームの原因は孫の作りし「功ちゃんルール」

小林 綾子

芳賀 ナツ

阿久津利江

菅野 公子

袖山 昌子

山口 あさ

稲葉 秀子

岩瀬 悦子

大曾根文子

菅野 公子

田中 久子

永瀬 貞子

西村 宗倫

松本 住江

森 純一

池葉 智

栗田 準子

小杜 芳野

齋藤 宏壽

齋藤 宏壽

齋藤 宏壽

齋藤 宏壽

齋藤 宏壽

齋藤 宏壽

仏壇に花を供える妹の「く」の字に曲がる指の関節

塩沢かつ子

春の風優しいとは言えずしてバケツもジョウロも隣家の庭へ

鈴木 玲子

つわぶきの花に足もと照らされて元朝参りの石段のぼる

瀧田 聖子

方程式が解けた解けたと乾杯す少し遅れた私の青春

長嶋 康子

那須野路を遊ぶは吾と影法師すすき穂花の銀波のなかに

増淵 等

汚染土も基準を下げて再利用 これが「アンダーコントロール」か

松山 宏意

「何ごとも終わるは寂しい」ポランティアの一つを辞めし夫の眩き

宮田とき子

歌作りやめると決めたその晩に詠じる我が夢におりたり

茂呂田 誠

鬼怒川の真竹削りて「長生」の銘ある茶杓作り贈り来

渡邊 力榮

兵士らに酒場で媚売る姑娘と同じ様見つ戦後の日本

渡邊 力榮

..... 題詠

独り酌む李朝徳利の贗物も手に馴染み来て温もりがある

青木 一夫

日の温みいまだ少なき土手に咲くオオイヌノフグリの青きさざなみ

押久保 準

病み上りの母を囲みし家族風呂その温もりは今なほ残る

栗田 準子

姑の夜具たつぷりと温き陽に干してデイサーピスの帰り待ちいる

瀧田 聖子

ストーブの温み頒け合う寒き夜は炭火の臭う炬燵が恋し

七井 新

器量良き南瓜選びて冬至にはほくほく温む煮物供える

七井トシ子

彼の世でも日々励むか針仕事 冬もぬくぬく母の半纏

松山 宏意

「温暖化も悪くない」とたわわなる蜜柑の庭木を友は指さす

茂呂田 誠

温和なる弟今は学長で故郷で語るロシア音楽

渡辺 典子

臨終に間に合わざりしを詫びながら母に縫れば温もりありし

渡邊 力榮

群馬県

一寸来い一寸来いと二度呼ばれ初めて聞きぬ小綬鶏の聞きなし

新井美智代

幼き日灸据えられし痕老いの腓に残りて父偲ばるる

石井 省三

座せばすぐ眠りむさぼるチャドルの女日本はそんなに草臥れますか

石坂ふさ子

膝に乗り頬にキスしてしっぽ振る犬を抱くのも老いのたのしみ

内田みのる

玄関にひらけばすぐに蕊切られのつべらぼうの白百合の花

岡 英子

娘の婚に揃へ置きたる亡夫の靴パージンロード歩きたかりしを

掛川真由美

近付きて食ひ入るやうに見る拓本石工の技牙ゆ六朝楷書

川崎 照子

新しき道に知りたる「自害沢川」赤城の裾野が丸ごと見えて

川本 福江

「そっさいね」幼友達と故郷の言葉で話すオーブンカフェで

岸田 佳子

三姉妹歳の合計は二百五十歳寝たきりの母笑顔でフォトに

岸田 佳子

椅子にかけ白髪ゆらせ両手ふる病後の指揮者を楽の音つつむ

熊澤 峻

焚火にて芋を焼きたることなどを夫とふたりに昔がたりす

栗原 伸子

平成に原子炉事故のありしこと記憶に刻む改元の春

桑原 謙

吹く風に決められる道あるらしく花びらは帯となりて流れる

小池百合子

色あせし亡母の羽織をリホームし春蘭の絵の香り出でくる

小板橋みしろ

日々を樂しめよとてDVD送ってくれた娘の優しさよ

小林 博子

歴史など話題にならず大杉は吊るし伐りされた一個の物に

斉藤 末廣

人氣です売れ筋ですと言わないでうちの主人はヘソ曲りです

品田たみ子

路の臺萌え出づる頃か真清水の砂を巻き上げ湧く傍らに

菅谷千恵子

薄切りにせし大根の素直さよ梅酢にたちまちくれなるとなる

砂賀久美子

なぐるみの山に北風吹く朝は狼煙の様に杉花粉飛ぶ

高橋 吟子

荒れてゆく大地復元するごとく若者畑に桑を植えゆく

高橋 恵

両耳に黄のタグ付けし小牛おり吾に近づき目にてもの問う

橘 祥之

公園の隅に遊具は置かれてグランドゴルフする人集う

田村 節子

陽に映えて頭上の燕は銀色にいつもの家族か旅立つらしも

田村美恵子

雷遠く猛暑の夏の百日紅共に茹だるやただ秋を待つ

田村美恵子

寡婦になり寂しむ姉に勧めたり短歌を作ってみてはどうです

出牛美恵子

終活もエンディングノートも書く気なしあとはおまかせお好きなように

中村 齡子

店員にお子様ランチと言へなくて半ライスにする孫のバースデー

根岸 豊人

雨ごとに潤ふ庭は色めきぬしじまの樹木も息吹を戻す

野口 弘

乳瘤を乗り越へ足の大手術のり越へくりやにキャベツを刻む

深澤 巴

歌人の友垣集ふ和やかに春の伊香保の短歌大会

深津 一次

留鳥にならんとするか城跡の濠に残れるつがい真鴨

福田 成雄

現金で生き来しわれは加速するキャッシュレス化の波には乗れず

松下 昭代

ドアを開け飛びつく我が子抱き上げ娘は母の顔となりゆく

松村 公子

米袋さかさに被りそのままに留守にしている水道の蛇口

宮下初太郎

ゆっくりと横断歩道渡る人に亡母を重ねてゆっくりと待つ

茂木豊久子

杏子の花咲き盛れるを目安とし春一番に馬鈴薯を植ふ

湯浅 茂子

「反つてますね」「母譲りなの」嫁はわが伸びたる足の爪切りくれぬ

湯浅 茂子

スマホかざし桜に遊ぶ実習生「廃炉作業は母に言へぬ」と

横山 房子

正直に生き来しを子に危ぶまれ咄嗟に偽るメールアドレス

横山 房子

三回忌過ぐれど縁変わらじと写真の亡夫はじつと吾れ見る

吉井カヨ子

赤城嶺が遠く霞みて黄砂舞う行き交う車窓かたく締め

吉沢 典子

……………題詠……………

それぞれの屋根に温水器を載せてトルコの町はエコ花盛り

天田 勝元

懐がこんなに温い死んでないと母に縋りし雨の如月

新井八重子

肌寒き日照雨に濡れて植直す田の水はやや温もり持てり

井田 善啓

白湯といふやさしき味に身を温め文字うづめをり山の絵葉書

糸井 孝

給食費無料化会議に向かう午後春の日差しは昨日より温し

今井 五郎

温もりのかすかに残る姉の手の爪あかぎれに膏厚く塗る

岩崎 久子

独り居の炬燵は温し居眠りてテレビの音に夕餉を終える

内田みひる

なき声も大きき重き温もりも猫は赤ちやんのやうと子が言ふ

岡 英子

文机の万年筆の三本は夫の温もりけふも手にする

金井 晶子

茶箱より出でし夫の半纏を頬に当てみる残るぬくもり

金井 晶子

温き陽の光の中で眠る柴サイレン鳴れば野生の遠吠え

岸田 佳子

水沢の野辺に読んだり万葉のをとめを慕ふ温き心を

熊澤 峻

きつとある全国一の日「館林」その夜われは汗拭き乾杯

熊澤 峻

温かな日差しが注ぐ空き畑昨日は雲雀今日はつばめが

倉沢美代子

草取りの手袋はづしタツチせり幼の小さく温かき手と

栗原 伸子

ストーブに手袋の手を温めて霜解けの畑に梅の枝切る

栗原 謙一

水芭蕉を見に行きましよう誘われる温き言葉に感謝して乗る

小池百合子

「温風」と刻み込まれし友の墓優しい風の吹くひとところ

櫻井 洋子

やせるなど大きき手をもて握手する院長の掌のあたたかきこと

三瓶 和子

雨の日のマラソンレース見て思ふ個々に取る給水温といのかと

品田たみ子

春たちて夫鋤き返す菜園に薯は男爵温もりに植う

菅谷千恵子

リヤカーに湯気立つ堆肥父が曳く後押したのは小六の時

関根 誠

生き生きと青の壁画の子供達伸びやかなさま心温もる

高橋 三枝

杖休め二人向き合ふ喫茶店カップに温む皺の双手を

長島さち子

米を持ち修学旅行は伊香保の湯てぬぐひ染まる茶色でありし

林 恵美子

若く逝きし母織りくれし秋色の紬の節のまろみて温し

原 由紀江

病む夫の足細やけど血は通ふ温みたしかめそつと布団かく

松下 昭代

ながねんの酷使に耐へ来て地球はいま温暖化とふやまひの篤し

松下 昭代

初めてのナイター野球父と観し手のぬくもりを今も忘れず

松村 公子

新緑の輝くなかを仲間らと温泉を目指し二十キ口漕ぐ

松村 蔚

ともに老ゆることまたうれし日だまりに「ひるのいこい」の曲の流るる

真庭 義夫

温き日の続きて桜進みしにセツトせると寒気襲ひ来

森田 育利

病得て良きこともあり温き友の情と短歌入選

矢嶋 とし

咲き初めし桜の蕾も足踏みす三寒四温に戸惑いて居り

吉沢 典子

埼玉県

湯葉一つ顔を見ながらすくいあげ大事な話そつと切り出す

新井 聡子

戦争を加害者として語りつづぐべき吾は九十三歳

石田満里子

隣家を見守るように咲き誇る古木桜は去年も眺めし

大峯 初江

眠れない夜は化石を掘ることくノートに書くど頭痛が止まる

岡田 美幸

大いなる西陽の中に沈みたる両神山りょうかみさんに白き月見ゆ

萩原 艶子

挑むように笑まうは若き講師三十五歳は吾れにもありき

笠原 吉江

店先に新たまねぎや新キャベツ 春の香りに予定外を買う

河原 敏子

ままことにも「しつけ」の景色多々ありて ほめたり叱つたり抱きしめる母

河原 敏子

弥生なれど未だ冷え込む河川敷青き住まいの点々と見ゆ

河原 敏子

冴えわたる月見上ぐれば口の端のことばひとつを胸にしまひぬ

倉橋 眞子

窓越しにま白き富士を眺めつつ喜寿の宴のワイン頂く

栗原 弘雄

秘境駅のブームが去れば静かなり廃駅間近を一人過ごせり

小泉 保則

伸びるもの容赦なく伐る無惨さに街路樹は哭く諸手なきまま

小暮 晴彦

うぐひすの声降るなかを妻とふたり馬鈴薯植うるしばしは黙し

近藤 章

仕事だと娘むすめが他国へと行く朝は両手を合わせ空を見上げる

坂田みつ江

花種を仏の好きなものばかりいろいろ蒔けり二人の小庭

志村 美好

わらび餅いらなけれど買う少しレジの美人と話してみよう

ファブリ

鯉のぼり泳ぐ大空眺めつつ土手の芝生に大の字となる

武井 猛

急カーブ三十回の坂道を登りつめれば緑の榛名湖

武井 猛

弟の骨と焼かれし十円の硬貨二枚が子らの御守り

中門 和子

父亡くて弟が打つ初太鼓社の柱に堂堂響く

林 直子

若き日は鋭き眼の我が夫は今、目力もなくおかめのまなこ

原口 亜季

カキドオシまたの名糲とり草わが庭の春を領してしずかなり夫は

古谷眞利子

我的手はチンパンジーの手と似るが豆ひとつずつ箸で挟める

村上 文江

支えられ足だけ漬かる湯加減に病気の妻は嬉しいと泣く

村田 利雄

親ガモと五羽の子ガモが列をなし春の小川をまったり散歩

吉田 幸子

春愁に「秘密の恋」の花言葉よぎりてアカシアのはちみつを買う

和田 鞆彦

………題詠………

にぎりあいし手の温もりを大切にたもとにいれし時に目ざめぬ

石田満里子

春来るとかすかにおぼゆ黒土はふれる手指に温りつたう

萩原 艶子

ままごとの役割演技意識なく家族の温もり語られていた

河原 敏子

彼のこと温和な人と褒むれども頼りになるとは誰も言わない

栗原 弘雄

一枚のがきに夢をのせている当選すれば温泉旅行と

坂田みつ江

摘みたての蓬の入る草餅を手に温かく押し頂きぬ

中里 勝江

肘ついて炬燵に観ていしかサブランカ淀川長治の「さよなら」聞くまで

平井加恵子

地獄谷温泉浴する猿の群れ一族郎党すべてが至福

宮川 富次

卒寿なるやさしき父母の思ひ出は心と体温めおりぬ

横岡 さつ

温かき春の陽ざしは桃色の光の粒の集まりと思う

和田 鞆彦

千葉県

メジロ来て梅の花みつ吸ひにけり腹ふくるるに何処へ飛びけむ

秋山 典子

先立たれ気になる友はと会いたれば晩の献立語りて去りぬ

石原 一久

バス路線廃止になりてまた一つ世間の外にはじかれてゆく

大槻 裕子

風花の舞ふにはしやぎて幼子はつかまへやうと赤き口あ開く

沖田 妙子

母になき齢を生きる我が庭の老木の梅静かに咲けり

出ましたよ貴方来て見て出ましたと便秘の妻の悦びの声

まだ慣れぬ修業最中の子が二人丸太足場をふらつき渡る

吹き荒れし春一番の十三夜のぶとき猫のこゑが聞こゆる

生ごみを日ごと根方に捨てをれば今年も椿まつかに咲きぬ

背を丸め小さくなりしその妻の車椅子押す夫の後ろ手

夢を見るふる里いつも山青く私は母のおさげの児のまま

「大和とは大いなる平和」キーン氏の言霊ひびく日本の空に

我よりも老いたる人のみ死亡記事ホッと安堵の朝刊閉じる

二十四の若さで逝きし一葉の皴ある札も顔に皴なし

全身を丸ごと声に泣く嬰の命みなざる産科のフロア

ほかほかの焼き芋食べつつ昭和など語るわれらは翁と媪

亡き夫の名札を見ればここに居る氣のして机の上に置くなり

肩書きの消えたる私の訪れを無視せる職場を静かに見たす

鼓草めぐりいっばい煌めきてテレフォンボックスの黒揚羽蝶

啄木はそを聴きに吾はフェルメールの様々な「女」に会ふ上野かな

干上がれる菖蒲園には名札のみが並び立ちをり墓標のごとく

旅立ちには誰にでもくるだからこそ青空の青を目にやきつけて

「テレビの音大きくして」と妻が言う「あいよ」と応えりモコン探す

子育ての悩み互いに聴き合いし友の住所に墓地の名加ゆ

……………題詠……………

寒冷の道路工事の若者はのれんくぐりて「ヤベー温ぬかいじゃん」

見送りて君の温もりのこる掌に岸の桜の花びらを受く

膝痛を抱えし日々に「俺がやる」「やるな・止めとけ」温もりの声

齊藤 肅江

菅谷 貞夫

鈴木造酒男

高伸 一郎

高伸 一郎

高橋 武子

高橋 武子

塚越 房子

浜辺 道夫

毘舍利愛子

毘舍利愛子

毘舍利道弘

溝田 節子

八木 健輔

山崎 蓉子

山下 利子

山本 一成

ミラサカシラ

吉田 巖

吉村たい子

……………

秋山 典子

旭 千代

伊大知駿子

古井戸に近きいちじく老木の枝先の芽に朝日の温とし

池の面に進む波の輪ゆるりゆるる映ろう緋鯉に春の温もり

温き部屋景色の見えぬ窓ガラス外の寒さを知るぞ結露で

確実に死への道のり歩いてる陽の温もりを背中にうけつつ

大腸のポリープは痛の芽とならむ語りし医師の眼は温かし

雪の朝晴れて眩しき温室に汗ながしつつか瓜の花摘む

地軸ただ少し傾くそれ故に温暖なりや北の半球

温泉はその名ひびけど家風呂は古い重ねたる肌に馴れあき

野の川の薄氷透けて輝ける今朝の日ざしは優しかりけり

春の日の器のように一輪のクロッカス咲くほどの温もり

久々に母の背に貼る温湿布 小さくなりたり九十七歳

昼の月見むとて翳す手のひらの寒の陽差しは母の温とさ

その昔アイヌが住みてこの地名米飯ベイバンと言う温くしふる里

水仙の角ぐむ庭の草取れば温もる土に蚯蚓あらはる

温暖化に北限上がるようにして引つ越すたびに緯度が増しゆく

なつかしき温泉郷の看板にみんなで探す予約の宿を

散水も施肥も自動の温室にコンピューター見る若者ひとり

同窓会の名簿届きて若き日に想いし君の温顔しのぶ

ふるさとの母校の跡の道の駅 給食メニューの店に温もる

久々の妻の旅行に夕飯を電子レンジで温めてをり

師の便りインクの青は温かく声音の聴こゆ「具体を詠め」と

東京都

道央に仰向けに往生の油蟬よそなた首尾よく思ひを遂げしか

壇上に離任の教師並びけりざわめきの後じつと聴く子ら

今関 弘

上田 康彦

上田 康彦

往古登美子

大槻 裕子

葛岡 昭男

國武 浩之

斎藤 愛子

斎藤 肅江

佐藤 陽子

高伸 一郎

高伸 一郎

高橋 益子

塚越 房子

毘舍利道弘

古山 春枝

森田 満子

八木 健輔

山崎 蓉子

山本 一成

吉村たい子

……………

青木 久彌

赤羽 克己

せがまれて抱き上げた時服につく孫のにおいは天使の香り

岩本 愛子

戦中派 たった一度の人生と捨てずに生きて今の幸せ

梅澤 昌子

病院の片隅の地の新芝に畑をつくる許可のおりたし

榎戸 源茂

手術後の躰なればことさらありがたく電車の席をゆづり受けたり

朝丘 清美

野に遊ぶ幼姉妹はきりもなく歩けば摘んで摘んでは歩き

北島 孝子

老いてゆく兆しは確か 白雲のように掴めず吾を眺める

栗原 良子

しるじろと入道雲の立ちのほりトネリコの木々に淡き花咲く

榊原 勘一

障害を持つ人持たぬ人ともに鉱石を選ぶ仕事する朝

柴田 慶子

赤く濃き案内板の現在地八月六日の広島に立つ

曾根新五郎

出棺の合図の一打に散る花のひとつひらはゆく人からの遺書

曾根新五郎

道端の塀に挟みし靴一つ小さきピンクが主を待ちて

寺田 知子

ぷくぷくに張り付いている頬の肉こんな処に幸は留まる

中村 美脈

洞爺湖に虹のシッポは流れ落ち小魚達はエンジェルとなる

中安百合子

頰杖をつきつつ医師は写真見る次こそ他所の病院へ行こう

華 春

夫と行く初旅なれば安らかな離陸の時を夜景楽しむ

野田 保

幾たびも生年月日聞く病院是非にも老いの年知りたいか

林 緑

底上げて嫁入りさせた末娘姑さんには愛でられており

北條 忠政

来し方の記憶たどりてさかのぼる友との距離は川の兩岸

松平 信久

庭先に立てば見られし富士山を隠して三十三Fマンション

水澤 眞澄

..... 題詠

本橋 正明

温かく大き眩しきお天道さま静々出らる二拝二拍手す

青木 久彌

温暖化少し進みし地球でも真冬の滝が氷柱に変はる

新井 忠彦

雪降りて温もり点す足跡よのら犬まさに家を回りにて

榎戸 源茂

省みて心で謝る情けなき言い争うは年老いた母と

川村智津子

幼子がばあばと入る温泉でわけもわからず「極楽極楽」

小島知恵子

天心の鼓動となりて揚雲雀鳴けば喪中の寒さ温めり

曾根新五郎

海女の母不漁つづきの海をみて海水温の低さをなげく

曾根新五郎

若くして逝きにし母の戒名に温容とあるを胸に忘れず

高田まち江

指先でちよんとつくと咲きそうな桜つらなり川風温む

中安百合子

手捻りの器をそつと手のひらで温めながら思い巡らす

服部 敏子

温かい言葉かけ来し彼のひとはむかしむかしの恋がたきなり

水澤 眞澄

亡き姑の米沢紬温もりの着物を解き半纏縫おう

惠 ハル

神奈川県 食べさせて撫でて名を呼ぶそれだけの猫との付き合い十年を越す

池田 佳子

オーロラの光のひだは移るひぬみどり色からオレンジ色へ

岩船 展子

けが癒えて森を歩くに細胞が原始の記憶を捜し出しおり

内田しず江

桜道背にこつこつと音のして黒髪さらりとハイヒールの過ぐ

小野 均

ひとつだけ今日することがちやぶ台に母は大事に日めくりめる

笠原 隆司

車窓から休耕田と菜の花が飛び込んでくる春の古里

越野 藤子

五年振りかへり来て見るふるとは未だ走れりちんちん電車

小平 貞

次々とシャワーのごとく難解な言葉浴びせる三島由紀夫は

高山 克子

子供等の帰りし後の公園に今宵も鳴きそむ閻魔コオロギ

松本 秀夫

「もう」と「まだ」二字の違いにこの吾も喜寿ともなれば少しこだわる

渡辺 勲

..... 題詠

渡辺 勲

温水のでるキッチンが弱かった母の時代に有りさえしたら.....

麻生 初枝

空屋多くなりたる谷戸に小綬鶏の声朗らなり温き如月

池田 佳子

寒き朝くず湯を飲んで温まる祖母のつくりし味なつかしく

お粥さんに青ねぎちらほら刻まれて如月の朝に温もり貰う

隣が越し二十五年の温情も空家と共に重機が壊せり

四姉妹も二人となりぬ八十九と五の叔母誘い温泉に向かう

冷えた手を電気毛布に温めて寝ながらに読む冬の歌集を

百姓の苦勞厭わず子のために尽くして逝きし父母の温もり

ロボットは介護世界の救世主温度はあがるAI時代

霊園の桜並木の春の土もぐらもぐも温く盛りをり

風邪ひくよ額に温き掌が転寝してたテレビ見ながら

さつそうとスクーターに乗り友の来るまだ温かき草餅もちて

かなかなのかそかに鳴ける上州の四万温泉は祖母のふるさと

朝の床に遺品の湯たんぽ引きよせる触れているのは亡母の体温

派出所を見学してゐる一年生おまわりさんの声温かく

温泉は若き夫婦をあたためる夢二も愛す伊香保の緑

新潟県

CDの止まりて聞こゆ梟の「のりつけほーせ」闇深くする

馬鈴薯の土寄せながら今日もまた雉鳩のででっぼうのんびりと聞く

かまきりの卵は高き枝にあり積雪占ふ今日の初雪

熱気球船岡を越え街越えて下りしは雪積むコシヒカリの田

政治家よ藤井聡太を見ならおう先のその先読み取る力

それぞれに越冬をして帰村すも源爺ちゃんは施設に眠る

飼主が来たれば山羊は目を細めうるると喉鳴らすなり

.....題詠.....

庭樹木の新芽の緑の温かさ限りなく愛し傘寿の我に

岩船 展子

小野 均

小野 均

桐生 春江

小平 貞

小林 勤

佐久間和子

東海林千津恵

風伸そい子

高山 克子

富沢 昌晴

内藤 洋子

中村久仁江

原田亜璃沙

秋月 睦子

佐藤佐一郎

佐藤佐一郎

佐藤佐一郎

関 泰邦

関根恵津子

堀口 良作

本多 義夫

金子 和子

神迎への木貝響かす子供らは温き甘酒に鼻水すする

雪見舞とて戴きし紙懐炉低温やけどに注意して貼る

富山県

子にひかれ松本城の階を八十六吾必死に上る

水洗い終えし茶碗を重ね置きたたり落つる水滴愛し

触れたればびたりと止る躰なる夫の寝顔の安らぎに安堵

腰まがり友は空をば見られぬと嘆けど空は貴女を見てるよ

.....題詠.....

足伸ばし「温かいね」と孫は笑み「コタツ大好き」明日も来たそうね

蹠きてよろめく吾を支えたる強き夫の手温かきかな

宿の下駄引つ掛け遊ぶ石段街湯気まで旨い温泉まんじゅう

石川県

銜いなくしてきた事を言い遣し死して後にも演じておりぬ

怖かったコーチの握手ぬくといと方言も出て涙の卒業

矢車の花の青きを地に下ろし五月はとほく人をおもへり

先を行く肩幅広きその脇に腕入れたし仮の一生は

婦女の手が妻の体を抱きしめて一気に立たすデイサービスの朝

骨折の腕にポルトの鈍き色二本見付けし取骨台に

種籾の直播きけいこか若人ら無人へりコプター幾度も飛ばす

朝やけに今生れい出し乳牛の仔が敷藁の中でよろめきて立つ

あやす言葉それぞれなれど子が泣けば親は抱きあく 地球は丸い

.....題詠.....

目の明かぬ子猫四匹納屋にいて互いの温みにもぐり込み合う

肌色に温める爪を見比べし父は我が手をポンと叩きぬ

堀口 良作

本多 義夫

市川 弘之

刑部 宏一

源通ゆきみ

源通ゆきみ

朴木 節子

石浦 好代

源通ゆきみ

中沖 正之

織田 健治

上嶋 美伊

亀井 玲子

北野みや子

新出 辰男

橋本外司雄

濱邊 孝子

堀 久美子

前川 久宜

飯田 世三

織田 健治

織田 健治

温もりに飢えていたのか吾の命泣きながら詠む花冷えの朝
目つむれば母の胎内凍てし夜の袖の湯舟に沈みてをれば
「令和」とふ元号伝ふる号外をとれば温くとくインクが匂ふ

福井県

照準を定める的は陽炎のかなたにありてゆれぬてやます
山の端を離る満月わが窓を猪歩く斜りを等しく照らす
むくむくと煙たちこめいぶかしむクンクンそれはやつぱり焼肉
フワリフワ福笑いのごと花びらを苔の上に置く山茶花の木は

………題詠………

幼子は袖湯につかるは初めてか一つ二つとよろこび数う

山梨県

これだけは忘れていけない午後六時猫のお食用意すること
ふる里は過疎化少子化高齢化鳥騒げど雀はおらず
般若心経の暗誦ならず諦めて亡妻の命日テープで流す
綿入れのはんでん手縫い家族分夜なべしていた昔の母は

………題詠………

葱・南瓜・人参・牛蒡鉄鍋にほどよく煮えて味噌かをりたつ

長野県

転職をして三ヶ月経てなほもコーヒー作る手の震へをり
むしゃぼりてカニ・かに・蟹を食べつくし被災支援バスの団体
知床の山より眺めし北の海近くて遠い島となりつつ

パソコンに向い時々ふりむきて私の具合を医師はたずねる

淋しさは時にひつつき虫になる「けふはどちらへ」「お墓参りに」
吾が送る食料品をまず姪に持ち行き分けて残り取る姉

上嶋 美伊
北野みや子
谷中 正秋

兎玉 普定
中橋 睦美

山田 孔明
山村 輝子

興法 恵

小林 静江
角田 好弘

宮坂 延雄
渡辺さちえ

後藤 榮子

池田 憲治

井澤 栄一
吉瀬 茂則

木下 慧子
佐々木桂子

柴田 康代

タッチしてぎゅっと抱きしめバイバイとそれがとなりの子との挨拶
ふり向けば道を教へし青年と目が合ふ新宿 角曲がる時
………題詠………

ハーブとふやさしき音色のコンサートに温き心となりて帰り来
オーバーの着丈袖丈肩巾を詰めてあなたの温とさを着る
せつなくも笑ってごらん温もりのある友の筆跡
先生に抱えられつつ温泉のプールに笑まう足萎えし子は
岐阜県

「入浴剤入れないでよ」と息子はいいし風呂でメロンを催芽するらし
難聴を患い四年夢でさえ聞き返しおり唇かんで
退院の車の窓より振り返るリハビリ仲間小さく消ゆる
夕立にうちかはかざして駆け込めば浴衣の袖のあやめきはだつ
鰻屋に焼き上がるのを待ちながら開く手帳にのちと書きぬ
榛名山肩を並べて眺めたる去年の姉の笑顔を偲ぶ
おしまひと絵本を閉じる教室に起立と響く少年のこゑ
勝ち負けの貌を乗せての終電車明日には明日の風向きあらむ
「歯を食ひしげれ、力を入れよ下腹に」ビンタもらひし昭和遙けし
夜半に覚め柔軟剤の残り香をシートに嗅ぎてまた寝ねむとす
干柿の仕上りくらべ向きかえるすだれごしから見る茜雲
サツサツサと抜き去りてゆく若者らモクモクとわれは歩み続ける
………題詠………

清原由紀子
佐々木桂子
高野 秀子
田中 純子

井上喜美代
江尻 恵子
加藤富美恵
上村 篤彦
後藤 進
中村 敏子
細江 和子
松尾 東一
松尾 東一
三田村広隆
本山 順子
安江 弘行

草木の根の張りそうな木洩れ日に温められて福寿草咲く
手の平のわずかな温みに身じろぎてよちよち這み出す朝蜘蛛は吉
温き冬花咲くはこべ引き抜けば細くて強く深く深い根

池田 一江
池田巳和子
井上喜美代

池田 一江
池田巳和子
井上喜美代

パソコンが地べたに置かれ朝の陽に温まり待つは無料回収

やぶれ蝶温もり集う同窓会桜花の下にどっこいしょの声

傷口を舐めて温めてまた舐めて膝で居ねむる三毛のいじらし

足裏の懐炉の温み心地よく仏間の畳乾拭きをする

ピオラ咲き君子蘭咲かせ皆誉める寒波少なく光るしあわせ

春まじかすきでなかった岐阜弁でぬくとうなつたねぬくなりました

静岡県

鹿にもみぢ梅にうぐひす竹に虎俺におまへと丸く納めぬ

あそこから富士山を見て行くのかな首そり返し見送る飛行機

新しき芽の出づること確かめて葉は落つといふわれまだ死ねぬ

万の靴底ゆつくり歩みてゆくごとく寒の空行く雲の一団

子を抱へ七十余年は夢のごと航空兵の夫ハルピンに消ゆ

彼岸会の明けたる寺の桜花いずればはゆく道しずかに照らす

………題詠………

お握りを分けつこで食べる夢さめておむすび供え妻と話しぬ

寒暖の気温交ごも早春を激しく揺すり嵐過ぎゆく

愛知県

空襲の夢見て真夜に飛び起きた三歳の恐怖今もありあり

千年の樹齢かさねる我が里のクスに耳当て春の声聞く

痛みから解放されて黄泉へ行くパーキンソンに耐えたる友は

高名な医師の執刀なればこそ心臓病の命ありけり

介護師が拭いておる中恥部さらす寂しきことも病む身に馴れる

わが物を残さず箱に詰め終えて振り返りつつ病室出る

八十が八十を押す車椅子みどりの風の湯の街をゆく

後藤 進

高崎 道弘

田中 光夫

樋田美和子

牧野 春子

安江 弘行

飯田俊文子

梅原 正子

後藤 瑞義

清水美千代

菅沼あさ子

渡辺 豊子

大庭 拓郎

野村 脩二

伊藤 忠男

今泉 一夫

今泉 公子

大成 金吾

大成 金吾

大成 金吾

笠井 忠政

サッカーが終わり敗者の後ろには勝者をうつすカメラ居並ぶ

主のなき山辺の家はムジナ住み凍てつくまんま雪積むまんま

軽二台ならぶ土地には九月まで婦人が独り住みし家の在り

手を振りて駅に別れし幼友北朝鮮にいかにか老いけん

正月に遠方の娘等集まれば我が家のDNA多様さおかし

ヘルメットは真つ赤な色を選びたり地震の備えが徐々に増えつつ

フランス語の講座今日で終りなり「merci pour tout à bientôt」

眼をみつめ笑みや怒りをさぐってるマスクが本音を隠しているから

冷蔵庫開ければ明るき光洩れ眠れぬ真夜にチーズをさがす

雪原に凍て付くズボン並び立つ北の大地は零下二十度

先頭はさだかに見えズームアップさるれば決死の難民の列

身のまわり無音なるかと思ふ突発性難聴吾を襲いて

空き箱に足置きておりちよこんとね施設の母の誕生祝ふ

じいちゃん歯がすーすーと鳴ってるよ。なんだ人歯ねと兄は笑うなり

癖のある大きな文字の年賀状声が聞きたく電話してみる

………題詠………

Tシャツで空港に立つ気温五度ブラジルに冬あるとは知らず

焼きたての安納芋をいただきて二人暮しの夜はほっかほか

ベビーカーふつから突き出た嬰兒の足裏を温い風が撫でゆく

ほわほわと湯気の向うに夫居りて旅のランチの湯豆腐かこむ

話題決め娘と会うも寒いねと二度言つて飲む温いコーヒー

ジャンプして園児はわれとハイタッチ温み交わして一日始まる

師の賜びし形身の椿微笑みて冬日に温き青空を指す

桜すぎて紀伊の海は早初夏ならん温き白砂足裏が待てり

笠井 忠政

笠井 忠政

島田久美子

嶋田 稔

杉浦 道子

添島貴美代

中根 英一

野崎 祐子

野田 幸子

羽生由紀子

藤掛 宏子

牧 正吾

松井 孝憲

八木ゆり子

山田 妙子

伊藤 忠男

今泉 公子

加納 金子

河合 佳代

島田久美子

嶋田 稔

杉浦 道子

添島貴美代

玄関のゴムの木も寒は辛からん温めし水をほどほど飲まず

添島貴美代

手袋を忘れたふりして君に手を温められた熱い雪の日

西村 愛美

元気かと我を気づかう九十二の母の温もり受話器を伝う

福島 睦子

夏は冷たく冬はあたたかな井戸の水手柄杓に飲む活きてゐる水

藤掛 宏子

六ヶ月やうやく立つちする孫と両手しつかり結ばは温し

伏見 範子

田の夕べ蛙のように蛙追う兎は笑うなりほかほか陽気

八木ゆり子

嘘つきと別れて帰る道すがら温かく背戸で待つ猫思う

八木ゆり子

子も孫も出でて二人の仲温く枝垂れ桜の公園を行く

湯朝 俊道

三重県

外国の民を呼び込む日本は子育てできる国にこそあれ

岡 公一

万緑の伊香保神社に見下ろせる温泉街に灯り点りぬ

奥山 功

船員の父の帰宅は六月ぶり改札口に子らは待ちけり

中野 千鶴

一杯のお茶にやすらぐ一時よ音楽にのせ心解き放つ

松生 彌知

やがて娘がつとめを終へてもどらむと夫は火鉢にもち二つ焼く

椋本 明美

毎夕に「おばちゃん元気」せいちゃんの六歳の声に生きる九十二歳

横井 ふみ

………題詠………

我慢させ平等貫き笑わせて九人育てし母の温もり

内田 雄亮

温泉の醍醐味知るやゆつたりと猿の入浴思はず笑ふ

澤村 節子

家にては子煩惱にて温厚な父は職場で厳しかりきと

中野 千鶴

温かきタオルに御身ぬぐはるるお地蔵様に冬の日そそぐ

椋本 明美

水温む散歩の溝に赤メダカ白メダカいて目をなごませて

森田 晴子

弟に温たいのうとよろこばれ編む靴下も指のリハビリ

横井 ふみ

滋賀県

住人が街より先に老いてゆく 昔エリート今は孤老に

田中 新一

木蓮の白かこんな植わつた 老いゆく街の戸毎に春が
ガラパゴス諸島のやうな比良の里猿鹿あれも固有の種なれ

田中 新一
東 佐久良

………題詠………

温めた食べ物なきかと寝る前のレンジ確かむ点検ふえる

田中富士子

足背ゆ母の温り伝はりて自尿のしづかに管を流るる

東 佐久良

京都府

合格の報せまつ孫いつになく神妙なりて食パンを食む

鯨本ミツ子

片方の下肢のギプスに吾の自由見事にもがれ歩みを恋うる

北川千代子

山里に折りのように春が来る人知れず咲く桜の古木

下岡 昌美

………題詠………

片手ずつ脇に温め歌書を読む窓も凍てつく寝覚めの床に

近江 瑞子

病室に入る明るき光ぬくもりに今日のリハビリ背中おさるる

北川千代子

大阪府

明けはやく目覚める時の弥生良し日の出が室の真向ひになり

太田 富貴

この道に見守られつつ蹲るあの老犬にこの頃会わない

笠井くみ子

まなぶたを閉じて一日を振り返る何もなかった特別なことは

金子 公宥

押し入れの非常袋を開けてみれば単四電池に錆のみつかる

熊ノ郷紀子

直角に寝そべってみるおふとんの隅っこ初初しさ残りおり

黒木 淳子

神仏のお加護と巧みな医療持て吾は三度の命賜る

田中 梅子

加湿器のしゅわしゅわしゅわに身をよせて猫が毛並みをうるおしている

富田 桜子

チヨコレート置く 亡夫へ撫順とシベリアに果てにしあなたの弟へ父へ

富山 純子

スマホ見る車中の人ら浴け込んであわれいつか「カオナシ」となる

長井 洋子

捨て猫の丸丸太り「にあ」と鳴く孤り暮しの多かりし街

西村 進

武藤 小夜

パンパンと釈台を打つ張扇韋駄天走りの安兵衛の見ゆ

……………題詠……………

温室の昼と夜とを逆さにしドラゴンフルーツ花咲かせしと言う

温暖化するごと地球を揺さぶるは可愛い名前のエルニーニョ

「ばあちゃんの腰もんでやる」六歳は馬のやうに温い息をはきつつ

大風に枝を挽がれし大木の幹を抱けば木肌の温し

兵庫県

「こんにちは」微笑む母に医師は問う「今の季節は」「百ひく七は」

ほふほふと熱き器に口付けす出汁たつぶりの豆腐がわらう

今まさにラクダ描かれしバスが発つバスターミナルは夢だけでも運ぶ

波しぶき浴びて瀬戸内クルージング婚五十年貸切りボート

ことごと煮込みし大根あじ深く母の心のごとくやわらか

目も鼻も少しかしげてなにを問う姉の切り絵の猪の愛らしき

……………題詠……………

温盛の蕎麦入れて食む鴨汁のしこしこほろり歯ごたへも食む

パレーボールに痛めしひぎを雨の日に母はさすりて温めくれき

万歩計夫と二時間ウォーキング体全体ほかほか温し

しらまゆみ春陽は庭にひろがりて躊躇の水ほのかに温む

六帖間にふと敷き詰め親子八人貧乏暮らしも温かかりし

カーテン開け日差しのとどく部屋に座し温もり背に新聞を読む

奈良県

ひとり居に話し相手はロボットの和らく声のおはよう おやすみ

耳・尻尾・手足・口許くちもと白うさぎ ジグソーパズルの雲と戯る

理髪師に「天皇様のように」とお願いす夫の髪型品のよろしく

山口佐智子

笠井くみ子

金子 公宥

熊ノ郷紀子

西村 進

木内美由紀

木下加代子

笹津ちよみ

佐保田明子

竹内 安子

浜畑 悦子

大村 博子

木村 仁美

佐保田明子

竹内 安子

浜畑 悦子

船引 貴明

内藤 晴子

中川 啓子

藤野 薫

八十過ぎて整理をしつつ一番の厄介なるは吾かと思ふ

自転車をかぎて買物するわれは令婦人とは呼ばればすまい

和歌山県

背を曲げず椅子には深く腰を掛け下腹に力もう一時間

両の手の窪におさまる卵一個春来たことを知らせてやらん

内裏さま五人囃子をお聞きかないと楽し気な御顔みせいる

木蓮の散りほう白にふと思ふ明日染めようざんばら髪を

娘むすめが送り来し脳トレの本二冊七十五歳のわが誕生日

キジトラのノラが「ニャーン」とこすり寄る わたしは君の主人ではない

……………題詠……………

思い出すとあつたかくなる胸の辺そんな家族を作りたかった

鳥取県

今にして貧しさ光る戦後の子かの学び舎はノアの方舟

……………題詠……………

麻痺残る指を温めて老友は礼拝堂のオルガンを弾く

産みたてのたまごを手に受け温もりは50グラムの命の重さ

島根県

群馬県は地図を広げて指をおく私は島根九〇〇km果て

身をよじりまた跳ね回り白梅の枝かき鳴らす目白の三羽

一つずつ小銭を老女が花のごと出して払いぬ外は寒き日

……………題詠……………

ほっこりと小豆色なり今朝の飯プランター育ちの古代米混ぜて

仰ぎいる人の口もとみなゆるむ桜の花には温もりがある

築百年木の温りは覚ゆれどすき間風など老いには染みる

藤野 薫

松井 純代

小田 実

北村 薫

木下 昭一

木村いく子

木村 召子

立川 唱寛

中尾 加代

柳谷 保

荒井 玲子

黒見 明子

三中 里予

田中 勝美

田中 勝美

田中 勝美

金山 黎子

田中 勝美

田中 勝美

右田 通泰

田中 勝美

田中 勝美

田中 勝美

田中 勝美

岡山県

うづくまる狸の命冷えゆきてそこを家とするものら這い出す
蟪蛄の卵付いてる枯薄野菜畑へ茎ごと移す

岡田 耕平
杉 秀樹

跳ねうさぎ住むを信じる孫たちとしばし見ているスーパームーン
心臓のペースメーカー埋め込むを決断し我の体も「リフォーム」す

辻岡 幸子
安井 孝誌

……………題詠……………

一時で備中高松から来たと話す声あり有馬温泉太閤の湯

岡田 耕平

古文書の入門講座の新生活生温厚な師にまずは安堵す

杉 秀樹

母さんが二三日留守でも大丈夫「チン」して温めるだけでいいから

三宅 照司

広島県

月検診医師はわたしの顔色をわたしは医師のかおいろをみる

秋田乾一郎

月一度仲間と語り二十年心ひそかに別れ決めたり

迫 幸雄

「死ぬときは死ぬ」と漏してしまったり長寿をすすめる役所の電話に

住田久美子

まなうらに無数の海月たゆたえり水族館を訪いし日の夜

田中伯見子

崩れ掛けの小屋の支柱を助くごと八重の桜はどっと咲きおり

峠 美恵子

同行と別れの握手して立てばその温もりは駅までつづく

藤永あさを

……………題詠……………

いそいと夫はほど木に穴をあけ吾はしいたけの植菌を打つ昼

石口 史子

季節ごと種まき育てし野菜たちハウスの中で季節無くせり

迫 幸雄

牛乳の温め具合が十秒違う夫とわれとの間合いのような

住田久美子

針仕事せる祖母のわき縁側で脚ぶらつかせ話し込みけり

田中伯見子

島の同行は栈橋まで送る舟の別れは長くてつらい

藤永あさを

卯月きて八十七と思いきや一歳若く小さき喜び

毛利 玲子

山口県

ひよっこりと帰ってこぬか法要の読経に和して声高くする

相川美津江

赤き芽を指でチヨコチヨコ探しおり「あつ」あつた咲くよ芍薬の花

川本久美子

野良猫の母は仔猫の父にさえ油断ならぬと四肢を踏んばる

清木 幸

雪降る日真つ赤になった孫の手を両手で包み息吹きかける

田中千佳子

わが母をおふくると呼ぶ養子夫長年経ても見解合わぬ

松浦美智子

旅をして喰べるばかりの番組に食べられぬわれテレビ消したり

松浦美智子

ないものがほしくなるらしわが身内冬の渴きにバイナップル噛む

松浦美智子

老いの会よもぎを摘みて餅をつき餡を入れつつ皆んなにここに

本永百合子

花すこし残ればよろし紅梅に寄る鶴も遠来の客

森田アヤ子

河豚刺しをごそつと箸で掬ふとき若き自分がどこかにひそむ

森元 輝彦

猿山に雪割草を訪うた日は曇りのち晴れときどき霞

山縣満里子

御向いに越して来ましたと言う人を待てど桜は散り始めたり

山代屋貞子

立ち位置はスマホの画面に印ありわが行く場所を人に問うたり

山村美代子

……………題詠……………

けぬる
気温しと見上げる空の和らぎて犬のふぐりは日溜りに咲く

清木 幸

温もりを求めて撫でし愛犬や触っていいよと仰向けになる

安野たかし

寒風に夫の帰れば温度計部屋の温度は下がっておりぬ

松浦美智子

私の住む日差しをの温いこの村に忍び寄る文字限界集落

松本 進

菜の花の田圃の辺りより聞こゆ朧月夜のハーモニカの音

森田アヤ子

焼きしめたクッキーに埋もる豆チヨコの温もる昼を君と分け合う

森元 輝彦

徳島県

今日使う金はいくらと決めている年金暮しの買物籠は

小畑 定弘

.....題詠.....

たつぷりと春の陽吸いし干し物を妻の仕草を真似て取り込む 小畑 定弘

香川県

どんぐりの三姉妹なれど写真では笑顔上手がかはいく見える 塚原味紀枝

残された余白の頁はメモ欄となりてこっそり収まっている 森本 義臣

ポロポロになつてもやっぱり引いている小さな歴史がそこにある辞書 森本 義臣

.....題詠.....

庭の梅散歩の犬に見上げられ温ときものに身をつつまれる 赤松美和子

隠れいしメダカの親子泳ぎいる水温もれば水面に出て 庄司ハナ子

遠くまでレディースデイのスパ通ひ十分延長「あかすり」目当て 塚原味紀枝

手に触れる体感温度をたしかめて静かに握る一本のペン 森本 義臣

愛媛県

幼き日「ようおいでたなもし」祖母の声さくら咲く城父のふるさと 安部ヨシ子

お向ひの家毀たれて棟札を瓦礫の中より拾ふ主は 井上由美子

足の甲の上に卵を温めて皇帝ペンギンオスは歩かず 窪田 憲二

沈丁花の香りを君に届けたい引きこもる君の玄関に差す 豊田 里恵

たわやすくルービックキューブ解く人は浪速の生れ娘のお相手だ 眞部 孝司

青魚父の嫌へど身のためと今日も買ひ来ぬ瀬戸の釣り鰯 三島誠以知

待ちくれし人みな逝きて峡の里石垣の間に鎌のさびをり 渡部 節子

.....題詠.....

「持つといき」歩き遍路の若者に媪が手渡す温州みかん 宇和上 正

温かな電話ボックスに駆け込んで君を呼び出すクリスマス夜の 眞部 孝司

山寺に童女の小さき像並び首かしげ笑む春の日温し 山口ひろむ

高知県

マスクからはみ出た目玉引き連れて横峯さくらシヨットを放つ 石元あけみ

花に合う可憐な名前で良きものを犬ふぐりとは哀れなりけり 下井 重男

ふはふはととびくる虫のたましひも春のまぶしきひかりに躍る 依光ゆかり

.....題詠..... 池知さつき

失敗を誰にも言えず図書館へ塞ぐ心に文字温かし 石元あけみ

ありもせぬ来世なんぞを思案して店屋物など温め添える 下井 重男

昨日未だ固き花芽も今日見れば紅差す蕾となりて驚く 青沼 君子

福岡県

「腐葉土と苦土石灰と鶏糞と耳に新し初土いじり 泉谷 陽子

大声に物喰いながら参道を闊歩する人あんたがたどこさ 市川登美榮

ようやくに針孔とおる糸の先女神の前髪つかむごと引く 塩田 直子

旅靴を解いてはじまる日常に白つるばみの夕暮れせまる 瀬戸口真澄

貸し農園の手押しポンプのありし跡蛇口となりて家建ち始む 矢部千壽子

やよひ陽の神さびて宮の森ひとり佇てばするどき鳥の一声 市川登美榮

.....題詠.....

枕持ちわれのかたえに入りくる母無きおさなの温もりを抱く 市川登美榮

幾度も碎き捨てたき思ひあり時効にせむと温め酒酌む 岸原 修

散歩途中の無人の店に購ひし温もりまとふわけありみかん 瀬戸口真澄

温度差がこんななありしかあなたとのけふのけふまで気づかぬままに 立石 文子

佐賀県

深々と一礼をする駅員の姿消えたり無人の駅に 眞子美佐子

長崎県

口あけて童みつむるシャボン玉庭のチューリップ映しつ浮く 佐々木祥一

ポケットの手紙忘れて洗濯す黒やぎさんと呼んで下さい
尻餅をつけば立つことできぬ母身嗜みよと呼びベル首に
温かなさん度三度の銀舍利は愛なり君と相向かひ食ぶ

………題詠………

お天道様と祖母の言ひぬし言の葉の温石抱くごときぬくもり

山下久美子

熊本県

手のひらのスマホ扱う時代の来てアトム時代のドラえもん時代
平安の先祖に我も似たるらむ娘も吾も母にそつくりなれば

太田 清美
野崎 礼子

………題詠………

温もりの残りし亡骸拭きをれば飲み込めぬままの水こぼれ出づ

野崎 礼子

大分県

ほろ酔いの肩触れ合ひし華の街消えて灯らぬ昭和のネオン
春雨に遠く烟りて一山の向かうは白い秘境のごとし
やがて咲く月下美人の花をまつかつては母と今宵はひとり

久保田嘉博
後藤 史子
高倉 政子

おほきな月浮かびし夜に言はざりし言葉はつりとふくらんでくる
歯ごときに負けてたまるかさは言えど痛いいたい脳天を突く
パンの耳はとの夕食にみぎひだり空をとぶたび小さくなりゆく
駅前より下車するまでの八区間バス一台を借り切りとする

田口 玲子
中島 絃子
中島 絃子
中島 絃子

………題詠………

正座する暮しの多き両脚を温泉の中遊ばせにけり

後藤 史子

立春を四月上旬の温かさジャンパーを脱ぎ駒打ちをする

佐藤 政俊

独り居になりて十年吾が住処田舎なれども温泉のわくところ

高倉 政子

三月の温き日ざしを掌にあつめ母の手包み春を伝ふる

田口 玲子

トローリとわが口中に沁みゆけり冷めてもうまし温泉卵

松本トシ子

宮崎県

夕映えの色しのばせるロゼワイン 乾杯にゆれほのかに照りぬ

熱田 民恵

………題詠………

陽だまりに耳を澄ませば聞こえるわらびぜんまい啓蟄の声

日高 保代

鹿児島県

遠く住む兄ありがたしこの家に山菜香る小包届く

橘木 重雪

人の世の波にもがきて傘寿越ゆ切り札出さず丸く生ききて

田中 司郎

日に四分信号待ちをすとして月に二時間年には一日

萬福 平次

………題詠………

温度差の違う二人の半世紀妻に合わせて日日は幸せ

萬福 平次

沖縄県

丁寧の説明するも「寄り添う」も口先ばかりの辺野古埋め立て
飢餓に耐え戦火をくぐり生き延びてふと口ずさむ軍歌ひとふし

平良 宗子
渡嘉敷唯正

………題詠………
迫りくる歌の締切り温めし草稿に手を入れる雨の日
シミに傷古き机に亡き父の温もり伝ふ手放せぬひとつ

砂川 節子
仲村 純子

NHK学園生涯学習フェスティバル
伊香保短歌大会
入選作品集

令和元年六月二十五日発行

編集発行 N H K 学 園

〒一八六―八〇〇―一
東京都国立市富士見台二丁目三六―二
電話 〇四二―五七二―三二五二(代)

印刷 明誠企画株式会社

作品集の作成にあたっては、あきらかな誤字・脱字
以外は、原作のまま掲載いたしました。
誤植など不備な点がございましたらお許しください。
また落丁本はお取り替えいたします。

NHK学園 伊香保短歌大会 入選証他専用額・トロフィーのご案内

「伊香保短歌大会」ご入選おめでとうございます。ご入選の記念にいかがでしょうか。

《入選証》 1通 1,500 円

- * A4判 (297×80 ミリ) でお届けします。
- * 切り離して短冊にすることが出来ます。
- * おおむね1か月でお届けします。

▼入選証

入選
多摩川源流伊香保短歌大会
而あとの陽炎ゆるる山径の陽にぬくもり
し落葉踏みゆく
加藤 洋子

入選
而あとの陽炎ゆるる山径の陽にぬくもり
し落葉踏みゆく
加藤 洋子

入選証を切り離して短冊掛けに入れた見本です。

①短冊掛け(青)

★作品は2行になります。ご指定のない場合は自動的に18字で折り返しますので、ご了承ください。

《専用額》

①短冊掛け (青)

材質は和紙、壁掛け用です。
1枚 1,500 円 (税・送料込)

②額 (クラシックゴールド)

上品なデザインで卓上・壁掛け両用です。
1枚 2,500 円 (税・送料込)



《トロフィー》

作品をトロフィーにお彫りいたします。

1つ 13,000 円 (税・送料込)

* 専用申込書をお送りください。郵便局からの払込票をお届けします。ご入金確認後からお作り始めます。お届けまでに1か月ほどかかります。

キ.....リ.....ト.....リ.....

令和元年度 NHK学園 伊香保短歌大会 トロフィー専用申込書

ご住所 〒 -

お名前 _____

電話番号 _____

掲載P	選者名	賞名	作品 (全文を記入してください)	数	金額

お申し込み方法 ①または②をお選び下さい。

①定額小為替の場合

下の申込書に必要事項を記入し、定額小為替（郵便局で購入）を同封して、封書でお申し込みください。

※定額小為替には、何も書かないで下さい。

②郵便振替の場合（払込取扱票そのものが申込書になります）

郵便局で取り扱っている払込取扱票の通信欄に（1）大会名、（2）作品の掲載ページと作品全文、（3）枚数、（4）選者名（希望の方のみ）、（5）賞名、また短冊掛け・専用額を希望の場合には（6）商品名、（7）数量を必ず明記してください。金額欄に合計金額を明記して、下記の口座へお振り込みください。

入選証および専用額トロフィーの
申込先・連絡先
〒186-8001（住所記入不要）

NHK学園教材サービス
伊香保短歌大会入選証係
TEL 042-572-3151（代）

← 切り取って
封書のあて名に
してください

<郵便振替の専用口座>

口座記号番号													
0	0	1	9	0	7			5	6	3	6	0	8
加入者名		NHK学園 教材サービス											

※ いったんお申し込みいただいた後のご返金はいたしかねますので、ご了承ください。

※ 過去の地方大会の入選証については、平成11年度以降のものに限ります。

※ 郵便振替の場合、下の申込書及び振替払込受領証のご郵送は必要ありません。

※ 申込書にはお名前、ご住所、電話番号をお忘れのないようお願いします。

定額小為替専用

令和元年度

NHK学園伊香保短歌大会

入選証および専用額申込書

名前	フリガナ	受講者番号											
住所	〒												
電話番号	-	-											

○入選証

掲載誌ページ	選者名 (希望の方のみ)	賞名	作品（全文を記入してください）	単価（1枚）	枚数	金額
				1,500円		
				1,500円		
				1,500円		

◆特選・秀作・佳作の作品には希望される方のみ、選者名が印字されます。

◆同じ歌を複数の選者から選ばれた場合は、選者別の発行（1選者1枚）になります。ご希望の選者名を明記してください。

○専用額

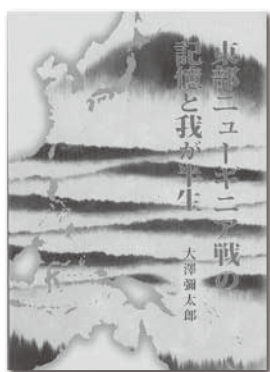
※ 専用額には入選証は含まれません。

短冊掛け（青）	数量	1,500円×	枚	金額	
額・クラシックゴールド	数量	2,500円×	枚	金額	

合計金額 _____ 円 を定額小為替で同封します。

※ 振り込みの場合は、この用紙のご郵送は必要ありません。

あなたの学びを 「本」にまとめて みませんか



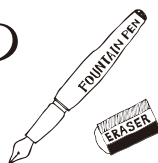
日々の出来事や想いを詠んだ俳句や短歌を

一冊にまとめてみたい。

あなたの人生と大切な作品を

一冊の本にしてみませんか。

NHK学園の 自費出版



学習の成果を1冊に

人生の節目に本を出版される方が増えています。自分のための1冊、家族に贈る1冊。お手元の学習レポートがそのまま原稿になります。

NHK学園の講師がサポート

各分野の講師があなたの本作りをサポートいたします。添削はもちろん、構成やレイアウトもお任せください。跋文も書き添えます。

ご相談・お見積もりは随時

思い立ったら是非一度ご相談ください。学園宛に原稿をご送付いただければ無料でお見積もりもいたします。

合同作品集

全国の仲間とともに一冊の本を仕上げる楽しさが味わえる合同作品集。合同歌集「さくら」、合同句集「くにたち」、川柳合同句集「ふじみ」、「昭和・平成の時代を生きて」など特定のテーマに沿って文章を綴る企画作品集。

俳句、短歌、自分史、エッセイ、アート、絵手紙、書道、写真など、学習の成果を自費出版される方を全面的にバックアップいたします。

2019 出版個別相談会(参加費無料・予約制)

開催日	開催地	会場
2019年2/15(金)	姫路	ホテル姫路プラザ
3/15(金)	名古屋	キャッスルプラザ
4/5(金)	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
4/19(金)	水戸	水戸三の丸ホテル
5/23(木)	高松	高松シティホテル
5/24(金)	高知	高知サンライズホテル
6/20(木)	福岡・天神	アークロイヤルホテル福岡天神
6/21(金)	宮崎	エアラインホテル
7/26(金)	新潟	アートホテル新潟駅前

開催日	開催地	会場
8/22(木)	福島市	ホテル福島グリーンパレス
8/23(金)	青森	ホテルJALシティ青森
9/13(金)	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
9/27(金)	甲府	ホテルクラウンヒルズ甲府
10/25(金)	金沢	ホテル金沢
11/14(木)	京都	メルパルク京都
11/15(金)	和歌山	シティイン和歌山
12/13(金)	小田原	小田原お堀端コンベンションホール

※相談会にご参加できない方で、原稿をお持ちの方は別途ご連絡ください。場合によっては直接お問い合わせします。

下記の時間枠を設定、先着順ですのでお早めにご予約ください。

①10:30～11:30 ②11:30～12:30 ③13:30～14:30 ④14:30～15:30

- 予約制ですので、ご希望の開催地・時間枠をご連絡ください。
- 会場にご来場できない方、遠方にお住まいの方は、お電話やお手紙にて承ります。
- NHK学園本校(東京・国立市)では個別相談を随時行っております。事前にご予約ください。

原稿は揃ってなくても大丈夫!まずはご相談ください。出版アドバイザーがいてないにご説明します。

お問合せ **NHK学園** 自費出版係 ☎042-572-3151(代) FAX 042-572-0061